

大人と子供も

第一卷
七號

謹 告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應するものとす。本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の状態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手錠歌、子守歌等に付さては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によるこ

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行二十字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべきこと。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

明治三十四年七月二日印刷
同 年七月五日發行

| 發行 | 每月一向五日發行（第一號明治三十一年一月二十日發行） |
|---|-----------------------------|
| 定價 | 一冊金拾錢郵稅金壹錢〇六冊前金伍拾七錢郵稅金六錢〇拾貳 |
| 購 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 編 | て別に申し受く〇切手代用は壹圓増にて壹圓切手に限る |
| 輯 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 讀 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 者 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 文 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 注 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 價 | 冊前金壹圓拾貳錢〇臨時增刊は首都度定價を定め |
| 是總て前金にて日本橋區本石町三丁目二十三番地今昌堂領收證は別に發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべし | |
| 送金は神田今川橋又は日本橋寺町郵便取扱所受取人今昌堂 | |
| 宛の事見本を要せらるいときは郵便切手（但し壹圓に限る） | |
| 拾貳枚を添へて申越さる可し | |
| 宿所姓名は楷書にて御認めの事〇轉居の場合は新舊共に御通知を乞ふ〇前金相切れ候時は赤にて印を細姓名の上に附し候間前金御送付を乞ふ〇御入用なき時は御断りを乞ふ | |
| に關する御照會及原稿御寄贈の節は東京本郷區女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會の事 | |
| 三十二行廿四字詰一行十八錢〇特別欄一行四十錢〇一等二十 | |
| 錢〇特別半頁十一圓〇一頁二十圓〇一等半頁五圓八十錢〇一 | |
| 頁十圓〇二等半頁五圓〇一頁八圓 | |
| 編輯兼發行者 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 | |
| 杉山辰之助 | |
| 印刷者 東京市東橋區木挽町九丁目三十二番地 | |
| 中野太郎 | |
| 東京市京橋區築地三丁目十五番地 | |
| 帝國印刷株式會社 | |
| 女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會 | |
| 發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 | |
| 昌堂 | |
| 金 | |
| 東京東京堂・同東海信文合資會社・同北隆館 | |

此廣告依に告御文注の方は人婦と供子をた見る旨御旨を記附乞ふ

高等師範學校教授文學士松本孝次郎氏校閱
宮崎縣師範學校附屬小學校主事伊藤裕氏著

小學校國語科教授論

全一冊 定價金七拾五錢

小學校國語科の教授法如何は目下教育界の一大問題たり今や著者夙に抱懷せる識見を實地に試み益所見を
慥めて國語教授の改良に一大光輝を添へたり本書特に言文一致體に記述せられたれば親しく著者に接して
其卓見を聽く思ひあらしむ

普通育児法

全一冊

定價金七拾五錢

醫學博士弘田長氏校閱
小兒科醫木村鉄太郎氏著

本書は古來より因襲する育児法と泰西の學科とにより現今實用せらるゝ最適當なる方法を平易なる通俗文
に記述し且平假名を傍訓しあれば何人にもて了解し易く殊に小兒病の看護法及食物調理法をも加説せられ
たれば「未タ育兒ノ經驗ナキ若キ母君ニ此上ナキ益友ヲ得ラレタル儀」と弘田博士の贊辭あるも宜なりとす

發兌

東京日本橋區本町三丁目

金港堂書籍株式會社



夏期講習會用書（其の二）

前付の二

倫理

| | | | | | | | | |
|--------|------------|--------|-------|---------|----------|--------|--------|--------|
| (○) 倫理 | 文學士服部宇之吉氏著 | 秋山四郎氏著 | ○中學倫理 | ○編修身學初歩 | ○育聖諭教本 | ○育聖諭衍義 | ○育教 | 湯原元一氏撰 |
| 學 | 全一冊 | 定價八拾五錢 | 學 | 全三冊 | 定價一圓三十五錢 | 全一冊 | 定價參拾五錢 | 全一冊 |
| 學 | 全一冊 | 定價八拾五錢 | 書 | 全三冊 | 定價一圓三十五錢 | 全一冊 | 定價四拾五錢 | 全一冊 |
| 學 | 全一冊 | 定價八拾五錢 | 書 | 全三冊 | 定價一圓三十五錢 | 全一冊 | 定價參拾五錢 | 全一冊 |
| 學 | 全一冊 | 定價八拾五錢 | 書 | 全三冊 | 定價一圓三十五錢 | 全一冊 | 定價四拾五錢 | 全一冊 |

教育

| | | | | | | | | |
|----------|---------|--------|-------|-----|---------|---------|--------|--------|
| (○) 普通教育 | 石田新太郎氏著 | 田中敬一氏著 | ○實驗教育 | ○用教 | ○教育學教科書 | ○希教育學提綱 | ○倫教 | 湯原元一氏譯 |
| 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 全一冊 | 定價七拾五錢 | 全一冊 |
| 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 全一冊 | 定價七拾五錢 | 全一冊 |
| 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 全一冊 | 定價七拾五錢 | 全一冊 |
| 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 學 | 全一冊 | 定價五拾錢 | 全一冊 | 定價七拾五錢 | 全一冊 |

發兌

東京市日本橋區本町三丁目

金港堂書籍株式會社

育教

| | | | | | |
|------------------------------------|----------------------------|------------------------------------|--------------------------------|----------------------------|------------------------------|
| (文)學士下田次郎氏著 ○教 育 原 論 全一冊 定價五拾錢 | (越)智直氏著 ○簡易教育全一冊 定價參拾五錢 | (森)本清藏氏著 ○星教 育 入 學 門 全一冊 定價貳拾五錢 | (樺)山榮次氏著 ○新實踐教 育 全一冊 定價四拾五錢 | (菊)太氏著 ○新教 育 全一冊 定價五拾五錢 | (樺)山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價六拾五錢 |
| 文學士 村上俊江氏譯 ○バルト教育學要義 全一冊 定價六拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價五拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價四拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價五拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價六拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價六拾五錢 |

授教

| | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| (樺)山榮次氏著 ○新教 授 學 全一冊 定價參拾五錢 | (大)村芳樹氏著 ○實驗教 授 學 全一冊 定價五拾錢 | (永)瀬伊一郎氏著 ○新編實用教 授 學 全一冊 定價四拾錢 | (土)井龜之進氏著 ○實驗普通教 授 學 全一冊 定價四拾錢 | (狩)野鷹力氏著 ○新教 授 法 全一冊 定價四拾五錢 | (山)高幾之丞氏著 ○實小學教 授 術 全一冊 定價參拾五錢 |
| 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價六拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價五拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價四拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價五拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價六拾五錢 | 樺山榮次氏著 ○新教 育 全一冊 定價六拾五錢 |



夏期講習會用書（其の二）

(前付の四)

勝田松太郎氏稿

◎單級學校ノ理論及ビ實驗

全定價參拾錢冊

土井龜之進氏著
◎普通心理學

全定價四拾五錢冊

田名部彥一氏著

◎實驗級教授術

全定價五拾五錢冊

文學博士元良勇次郎氏著
◎心理學

全定價七拾錢冊

教

授

○小學敎授法
森岡常藏氏著
全定價參拾五錢冊

○兒童敎授論
津田元徳氏著
全定價五拾五錢冊

○倫敎授學
湯原元一氏譯
全定價六拾五錢冊

全價六拾錢冊

心

○教育應用心理學
林湯本武比古氏著
全定價貳拾五錢冊

○新編應用心理學
高島平三郎氏著
全定價五拾錢冊

○教育心理學
塚原政次氏著
全定價七拾錢冊

全價一冊

○單級學校ノ敎授ト管理
岡本常次郎氏著

發兌

東京市日本橋區本町三丁目

金港堂書籍株式會社

| | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 理管 | | 理心 | |
| ◎山高幾之丞著 | ◎岩湯原元一氏著 | ◎田中勝之丞氏著 | ◎湯原元一氏著 |
| 實驗小學管理術 | 慕氏譯 | 大橋唯雄氏著 | 教育的心理學 |
| ◎山高幾之丞著 | ◎岩湯原元一氏著 | ◎田中敬一氏著 | ◎田中勝之丞氏著 |
| 小學管理法 | 合譯 | 實踐管理法 | 兒童心理學 |
| 全價一冊 | 定價六拾五錢 | 全價一冊 | 全價一圓廿錢 |
| 理生 | 理論 | | 史育教 |
| ◎生理教科書 | ◎學校衛生書 | ◎清野勉氏著 | ◎内外教育小史 |
| 全價一冊 | 全價六拾五錢 | 千頭清臣氏著 | 全價一冊 |
| 定價參拾五錢 | 定價四拾五錢 | 論理學 | 定價五拾錢 |
| 全價一冊 | 全價六拾錢 | 歸納論理學 | 全價一冊 |
| 定價參拾五錢 | 定價六拾五錢 | 全價一冊 | 定價八拾錢 |
| 全價一冊 | 全價一冊 | 定價八拾錢 | 全價一冊 |
| 金港堂書籍株式會社 | (前付の五) | | |

此廣依に告文注御り方御の文注御は人婦と供子をたる旨御記附乞ふ

大日本婦人聯合會機關



毎週 定)

一部金三錢▲一ヶ月十二錢▲三ヶ月
卅七錢▲六ヶ月七十二錢▲一年一圓
三十五錢▲全國無遞送料▲郵券代用

一割増▲一ヶ月以内の注文は謝絶す

讀め!!! 時勢に後れざらんと欲する婦人

文字は清潔にして平易なり

趣味は高尚にして多方面也

報道は精確にして親切なり

本邦唯一の婦人専門新聞紙
純潔なる家庭最好のよみ物
婦人會女學校に必要な機關

見よ!!! 廿世紀婦人の聲を聞かんと願ふ人

發行所

東京神田
小川町四十一番地

婦女新聞社

神田表神保町東京堂▲京橋
館屋町東海信文合資會社其重なる雜誌店也

丸岡月桂やの主幹

第一號

(六月一日既刊)

四六二倍形頗美本
寫眞凸版數葉插入



●金郵稿每月一回原定價五厘共三部用一割六冊增錢前五

和歌革新の聲實をあげて事實上所謂舊派の擊退せられ
しは斯道のため大慶事にあらずや。實に和歌壇は今わ
れ、ら青年の手に委ねられたるなり。
然るに世にこの機を利用してかの文弱淫猥なりし平安
朝の狂態を學ばむとする青年の團體を見るは如何。彼
等はたして詩美を知れるか。彼等はたして詩人の體面
を保てるか、彼等の言彼等の詩、もとより歎するに足
らざるとするも、而もわれらの清新なる和歌壇が彼等に
よりて汚されむとしつゝあるを見るは遺憾ならずや。
(あけぼの)に純美の詩を樂まむとする一團の士一小雜誌(あ
けぼの)を發行して、同人とともに宇宙の美を謳はむ
と欲す。
(あけぼの)は小なりといへども神聖なり。名利の子
の來るをゆるさず。敗徳の子の來るをゆるさず。人面
を被りたる魔物の聲をこの誌の上に聞かむは同人が最
もいまはしとするところなり。

(あけぼの)は和歌を中心としたる神聖なる文學雑誌
なり。長詩もよし。美文もよし。苟も美を忘れざる人
の手になりたる創作を掲載せむ。寄稿は大家なると
とを撰ばむや。

(前半のみ)

社合百姫 行發所 東京市神田區 保神三町番地

婦人と子とも第一卷第七號目次

| | | |
|---------------------------------------|--------|--------------------|
| 林文子嬢、松村久子嬢、豆州伊豆山温泉場の景 | 子ども首 | 和歌 文苑 |
| あさがと。唱歌。うさぎとかめ。鶏の葬式。紐遊び 朝顔と朝寝坊 一口話 考物 | 家庭庭 | 納涼 東 |
| 家庭の愉快は何邊より来るか 神門とも子 | 過ぎたる嫁方 | はと、さす |
| 裁縫 | 考へ物二題 | 歸省 田島 |
| 或母の日記 | 看護法 | 皇長孫殿下の御降誕を祝し奉りて 盛岡 |
| 英語俚諺解 | 看護法 | 海水浴 濱 |
| 蛙の話 | 英語俚諺解 | 女學生と浮華文學 林 |
| 育兒學 | 蛙の話 | 遺傳病と結婚 說書 |
| 兒童研究法 | 育兒學 | 紀州新宮の七夕歌(樂譜) |
| 野村望東尼 | 兒童研究法 | 子供のまゝごと 家庭 長野 |
| ローランド夫人 | 野村望東尼 | 記者と讀者 生 |
| 史 | 中村五郎 | 七月の天地 雜錄 |
| 傳 | 下村三四郎 | バルラド嬢の日本女子教育談 |
| 傳 | 中村五六郎 | 印度士人の家庭生活 |
| 傳 | 海生 | 女監を見る |
| 傳 | 海生 | 時言 |
| 數十件 | 彙報 | 抄時記 Y 湛 |
| 數十件 | 彙報 | 錄言 |
| 野村望東尼 | 中村五六郎 | 子生者 I |
| ローランド夫人 | 下村三四郎 | 子生者 II |

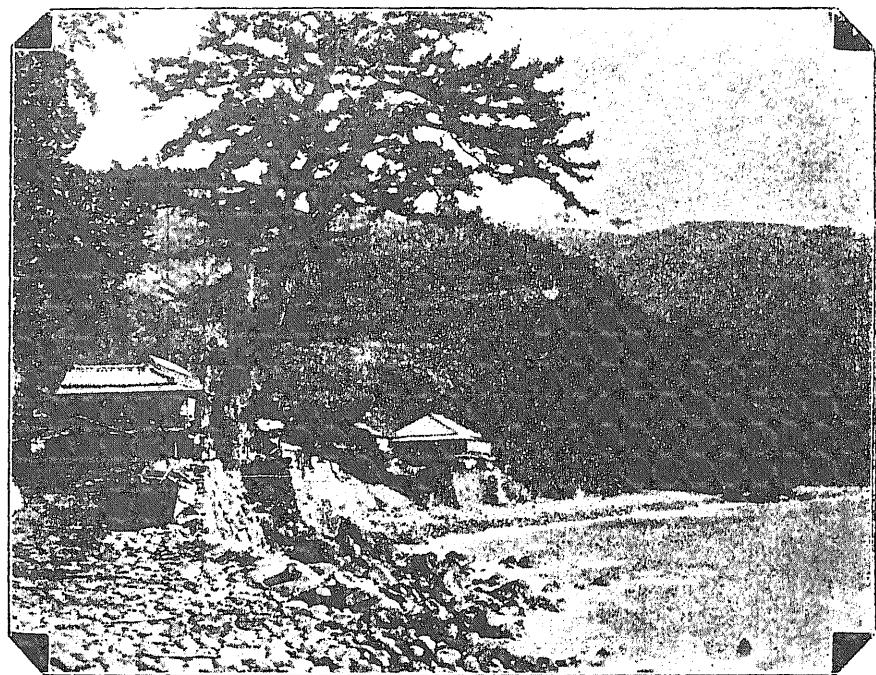
| | |
|--------------------|------|
| 和歌 數十首 | 文苑 |
| 納涼 東 | 東く |
| はと、さす | 田島ま |
| 歸省 田島 | すふめ |
| 皇長孫殿下の御降誕を祝し奉りて 盛岡 | 子郎 |
| 海水浴 濱 | 東 |
| 女學生と浮華文學 林 | 東 |
| 遺傳病と結婚 說書 | 秋影 |
| 紀州新宮の七夕歌(樂譜) | 東京 |
| 子供のまゝごと 家庭 長野 | 影 |
| 記者と讀者 生 | 記 |
| 七月の天地 雜錄 | 生 |
| バルラド嬢の日本女子教育談 | 溪 |
| 印度士人の家庭生活 | 飯島八千 |
| 女監を見る | 八千 |
| 時言 | 溪 |
| 抄時記 Y 湛 | 馬 |
| 錄言 | か |
| 子生者 I | か |
| 子生者 II | か |



林 文 子 嫁



松 村 久 子 嫁



豆 州 伊 豆 山 温 泉 场 景

婦人と子ども 第一卷第七號

(明治二十四年七月五日)

（本欄は凡て
鷺戯を禁す）



あさがをわ　あ
あさがを　さく
さ　はなが　さく
から　それで　あ
さがをと　ゆーの
です。



「あら おつかさん あ
さがをが こんなに た
くさん さいてよ」

『このしろいのと あを
いのとわ ぼくが うえ
たんですね はなちゃん』

「わたしのわ あかと
むらさき だつたのよ」

『さー おつかさんと 三^{さん}
んで あさがをの うたを
うたいましょ!』



あさがを



しろに あかに むらさきみどり
ヒトツ フタツ ミツヨツオツ ツ



いろいろ さきしにわのあ
ケサマタサキシニアノア

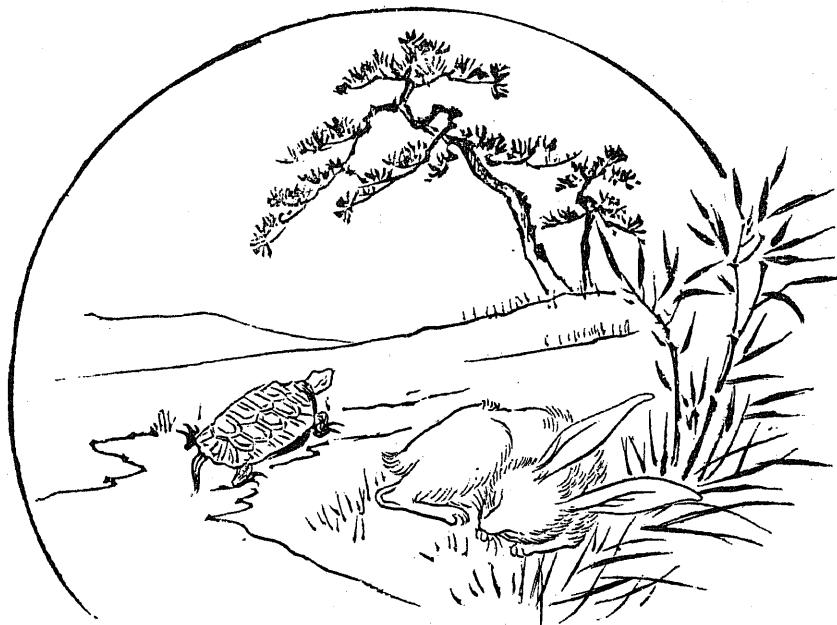


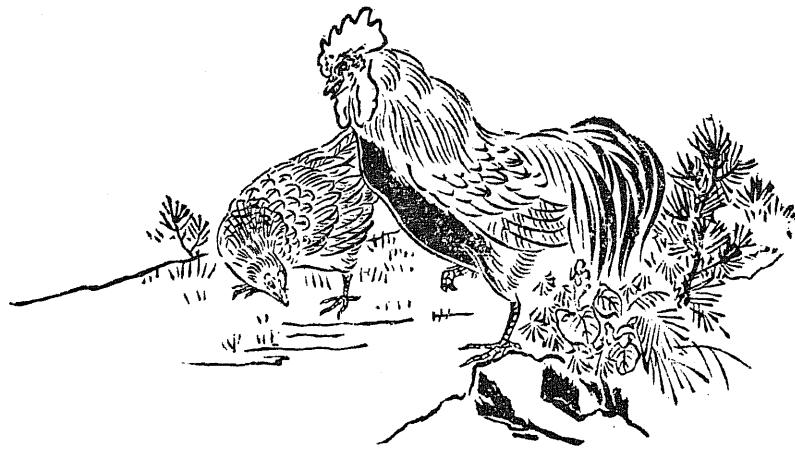
さがなうつくしや
サガチウツクシヤ

しろに あかに むらさき
みどり いろいろ さきし
にはのあさがを うつくしや
ひとつ ふたつ みつよつ
ひとつ ふたつ みつよつ
いつ、けさまたさきし
わのあさがを うつくしや

あさがを

かめとうさぎ
のかけっこ
『うさぎさんのねてい
るうちにささえかけ
つていつて一ぱんに
なりましょ』



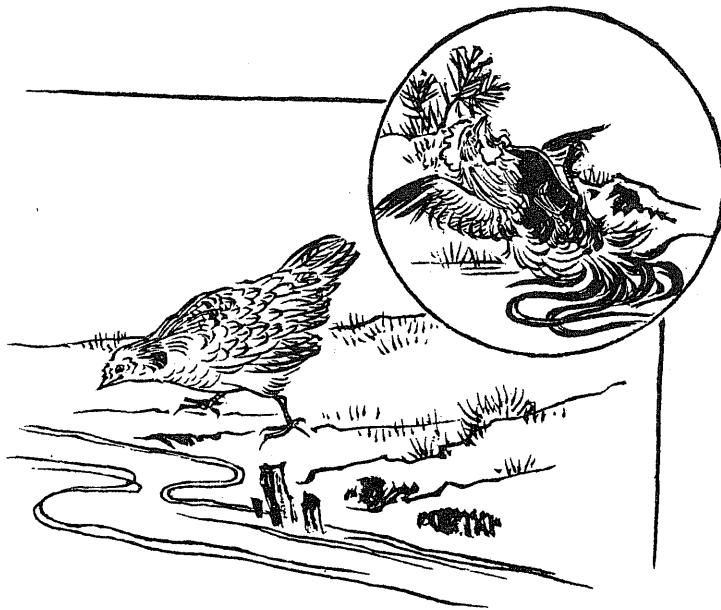


鶏の葬式

いつの事でしたか、ある處に
夫婦の鶏が一所に住んで居ま
した。お互に約束をしまして
誰でも一人が食物を見付けた
時わざり一人で食べて仕舞わない
で必ず二人で分けて食べよう
とゆることに決めました。
所がある朝牡鶏の方が
一の梅の種を見付けだしました、

であたりまえならば約束通り牡鶴に分けてやつて半分づゝ食べなければならぬんですねが、其の又梅の種が大きくて丸々して居て如何にも甘いのでありますから牡鶴わそれを分けてやるものどりにも惜しくなりまして牡鶴にわなんにも言わないで黙つて一人で飲み込んで仕舞つたのです。

所が大きな梅の種を一人で飲み込んだのですから堪りませんあんまり大きすぎて牡鶴の喉につまつたのでさ一牡鶴わ苦しくてくもー今に



息がつまつて死にそーになつたもんですから苦しそーな聲を擧げて牝鷄をよびました。

「あー、息がつまつて苦しい。今に死ぬかも知れない。どーかお願だから走つて行つて水を一杯取つて来て飲まして呉れあー苦しい」

牝鷄わ そんな譯とわ一向に知らないで 近邊で
 しきりに餌をさがして 居つたのですが この苦し
 相な聲を聞きましたから 吃驚して 何もかも打拋
 つて 急いで小川の方え かけて行つたのです。小
 川にわ 奇麗な水が どんどん流れてもますが さ
 一困つた事はわ 水の入れ物がない あちらこちら
 探して見ただけれども 見附からない 今にも牡鷄が
 死ぬかも知れないとおもつて あわてゝ 駆け廻つ
 てやつと 蜗貝のふるいのを見つけ出して それに
 水を入れて 口にくわえて 一生懸命に驅け戻つたで



すが　あーもー遅かつたです。見る
と牝鷄おひなわもー死んで仕舞しつて　動か
ない　身體からだわ冷つめたくなつて　目を眠ねむ
つて横よこにころげていまます。如何いかにも
苦くるしかつた様ような死しこに顔がほをして。

此有様このよを見た牝鷄おひなの吃驚くびきわ　どー
でしたろー!!!　さしあたり　蜆貝しじらを
そこに置いて　起おきして見たが　もー
起きない　嘴くちばしをあけさせて水みずを飲のま
して見ても水みずが通うらない　あまりの

事に聲も出ないでたゞうろくして居ました。されば見るほど悲しくなつて来ても一堪りませんので「一聲こー」とばかりに泣き出しました。

すると、牝鷄の泣き聲があまり高かつたもんですから近所の森の獸類が何事が起つたのかと思つて皆出て来ました。来て見ますと此有様で牝鷄が死んだ牡鷄の側に泣き倒れて居ます。そこで皆がだんく譯を聞いて「それわまーお可愛相に」と云ふのでそれくお悔みを述べています。然し何時までもこーして置く譯にも行くまい

何れお葬いのをしなければとゆーので 皆みなが相談ぞうだんします
さしあたりまづ 死骸がいを入れる棺桶かんとうを揃そろえ様ようと申
しますと 鼠ねずみが

『それわ 私共わたくしが 本職ほんしょくですから やりましょー』

ともーして 五六匹ごろつで 板片いたきだの木片きだのを何所なか
らか持もつて來きて見てる中に拵こしらえて仕舞しつた。

そこで 用意よがみんな出來でましたから さーこれ
からお墓はえみんなでお葬さむに出でかけ様よとゆーので 葬さむ
の行列ぎやくが出来でました。

牡鷄おとが一番いちばん先さきに立たつて 牡鷄おとの死骸がいを入れた棺桶かんとう



を車に載せて引きながらぞろくと練つて行きます。途々でもこの悲しい葬式に出遭う動物が皆其譯を聞いて吾もくも送つて行きます。

さてだんく行きました所が大變に深い谷川がありましたが

之にわ困つた 橋がかゝつて居ない さてどーした
 ものと 皆が寄つて相談しましたが 一匹の蛇が出
 て来まして『それなら さしあたり 私が橋にか
 つて 皆さんをお渡しもーしましょー』とすぐ蛇が橋
 にかかりました。

そこで 第一番に 牝鷄が棺の車を引いて 渡つ
 て向岸え着きました それから 皆の動物が一所に
 摺つて渡りかけましたか 丁度真中頃まで行つた時
 あんまり大勢一度でしたもんだから 橋にかゝつた
 蛇が 重さに堪えないので 川の中へ落つこちた で



大變な騒ぎになつて
皆が川の中で溺れて死
んでしまつたのです。

ですから可愛相に牝
鷄がたゞ一人で車を
引きながら小山の所ま
で來まして地を掘つ
て牡鷄を埋めまして
その上に土をかぶせか
けてそれからそこ

いらに在つた木片を其上に立てゝそれから其前に
ちやんと座つて泣いて居ましたがとうく泣き死に
死んで仕舞ひましたとさ。

之とゆ一のも皆さんはじめに牡鷄がたゞ一
人で慾ばりをしましたばかりでこの様に皆が
不幸な目に遭つたのでしょー!!!



室内遊び

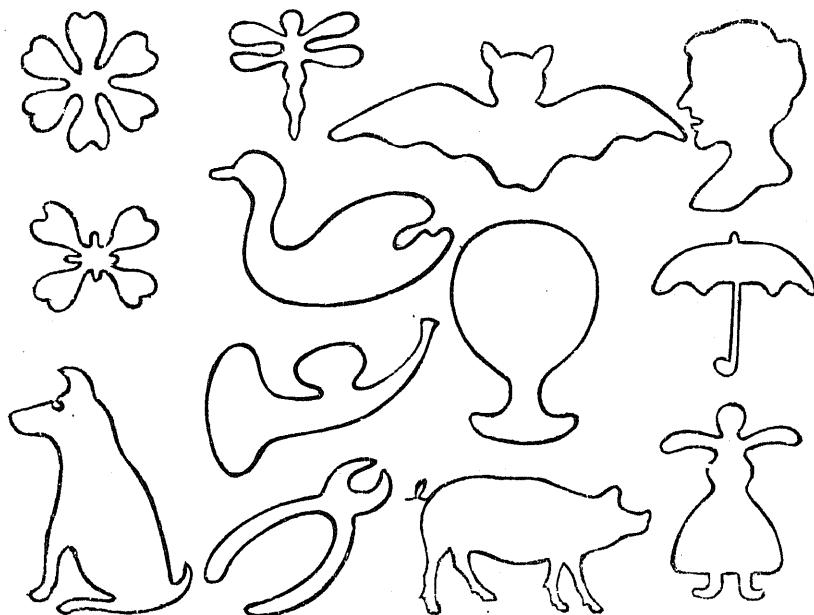
紐遊び

長さ二尺直徑し一分許の紐の兩端を、極ちいさ
い結目に繫いで、石盤の上に置き、鉛筆の尖か、
錐のさきで、彼方此方を付き出したり、付き込んだりすると、下の様な種々の形ができます。
これは、たゞの糸を水に、濕らしてやると一層
奇麗に出来ます。

朝顔と朝寝坊

やまととの翁

さても、ある處に一人の朝寝坊がありました



毎日毎日朝は十時を過ぎなければ床を出ない。此男ある時朝顔は大變に奇麗な花の咲く者だと云ふのを聞いて、或晩の縁日で買つて来て、豫端へ置いて見た。所が一向に花が見えない、何時見ても何時見ても、拳の様に萎んだのを見る許りで、頓と奇麗ともなんとも見えない。そこで殆んど業を沸やして又々縁日へ出かけて植木屋に談判を試みた。

「植木屋さん、いくら縁日の植木だつて、花の咲かない朝顔を賣るなんて、あんまり人を馬鹿にして貰ひたくないもんだぜ」

すると植木屋少し勃然して

『もしも私がお賣り申した朝顔が花が咲かないとおつしやるんですか』

『そーよ 每日々々 拳の様な萎んだのが、』

つひてる丈で、一度だつて奇麗に咲いたことはありやしない』

『へーー』

といつて見たが、急に氣が付いて、植木屋が『一體貴下は、朝何時にお起きになりますか』『知れてるはな聞かなくつても、大低人の起きる時に起きるさ』

『でも、何時ごろに』

『ソーサ、まづ十一時よりは遅くないね、遅くても十二時には起きる』

すると植木屋が吹きだして

『ハ、ハ、ハ、夫で分りました、其時分には朝顔の花は萎むんです、花を御覽になるには、遅くつても六時に起きたければなりませぬ、まー歎されたと思つて、一番五時に起きて御覧なさい、さつと咲い

てますから』

男は、そーかなとも思つたがまだ半信半疑の體で居りましたが、植木屋が貴君のお目覺になるのはも一時間では晝なので、其時分に喫くのは晝顔

である朝顔といへば朝喫くので、夫て朝顔といふ

ので、それを見るには、是非五時頃に起きたければならぬと説いたので、やつと得心して家へ歸つて、さて明日は、と云ふので目覺しを、チヤンと

五時にかけて寝ました。

さて明日になりますと、時計は間違がない、五

時の處へ来て、チン

〜〜〜と枕元で響き渡つたのでさすがの先生も

目を醒まされて、吃驚起き出で今日こそはといふ

ので、眼た目をこすり〜〜庭へ出て見ると、サー

奇麗だ、紅白紫斑青紺等の大きな花が、涼しことに

朝露を浴びて、青々と滴る様な綠の中に我劣らじと咲き亂れて居る、さすがの先生もなる程と感心して暫くは、茫然と見惚れて居ましたがこれは不思議！今まで

あれ程勢よく

咲いて居た花

が一つ萎み二

つ萎みだん

〜〜萎んで行

て見てる中に

みんな、拳の

様に萎んで仕

舞つた。あまり不思議でならないから

『一體、どしてたんだろー』

と叫びました、所が、朝顔の中から不思議な聲が



しがして

『別に、如何と云ふことはないんですが、貴君
が、御目覺めになりましたから、もう一晝だと思つ
て、みんな萎みましたのか。』

一 口ばなし

眞と眞との話

親『オイ々々伴、今家の前を通られたは、横町の
源兵衛さんじやないかい』

子『いーえ、お父つあん、ありや横町の源兵衛さ
んじやないよ』

親『ソーカ、乃公は又横町の源兵衛さんかと思つ
た』

前號考へ物の解

〔 Smiles を、英語の人の名の中で、一番ながいの
だとして譯は? 〕

答、始の S と、終の S との間が一哩 (mile) もあ

るから。

二十一を、半分に分けると、六ヶ所になるとどう、
其譯は?

答、XI を横に真中から、割ると、VI が六、VII
が六、(倒だけれど) そこで、六ヶ所になる。

同く謎々の解

〔一草履取とかけて? 答。後悔と解く、心は、前
に立たず。〕

〔二馬鹿息とかけて? 答。貧血症の患者と解く、
心は、血(智)が不足。〕

そこで、

この次の考へ物

二十

(一) いる時のいらぬもの、いらぬ時のいるものは何?

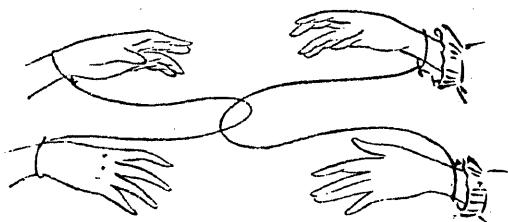
(二) 世の中に、真直でたてぬものは何?

右どちらも家の道具。

(三) 頭がなくて帽子あり足あれど靴なし、何?

右植物の名一つ。

(四) 下の様に、二人が紐をやり違ひにして、両手にしばりそれから紐を切らないで、離す法は?



家庭の愉快は何邊より来る?

家 庭



神門とも

其人の氣質が平穩で、いつも機嫌界がなくて、朝も夕も變りのない、親切な、同情のある人に接しますと、實に春日の溫風に吹き撫でらるゝやうで、至て心地よく、少々心に心配を有て居てもかかる人に會ひますれば、其心配も輕くなるかの如く思はれます、が、いつも、不平と不愉快に満されて居る人に會ひますと、誠に心持の悪いもので、始は

あゝ氣の毒だと思って居りましても、後には平和なる心も、亂されて、何となく不愉快になります。又一寸他家を訪問するにしても同様、一同が楽しげなるは、何となく、なつかしい心地せらるゝものであります。が、一致のない、不愉快なる家へは御義理一遍の訪問は、據ないとしても、つひく面倒になり、行きたくないやうになるものであります。他より行くものでさへ、かやうでありますから、其内の人の心持は推量することが出来ます。

己一人、不愉快がるので、誠に、いやなものであります。が、之が決して、自分一人では済みません、是非、両親があり、兄弟があり、血を分けぬ嫂があり、勞を售るの雇人と云ふものがあります。それが、皆誠に、感じ易い情を有て居りますから、造作なく、是等の人に傳染して悪感を與へ、

其形作る家庭をしてよし、不愉快とまで行かずとも、樂しからぬ家庭としてしまひます。子供の樂しからぬ様子、雇人の面白からぬ顔を見ても、厭やなものであるのに、是が、其主婦でありしならばいかに、或は主人でありしならば如何に、他のものは感ずるであります。やうか、家内のものは、沈みかへるべく、他より訪問したるものは、早々、逃げ出したうなるであります。されば、自分の爲にも、亦人の爲にも、常に、愉快なる心でありたい又、愉快なる家庭でありたいと思ひます。

さらば、どうして愉快にすることが、出来ますやうか、奈邊からその愉快は来るものであります。やうか、私如きものには、とても、是ならば、きつと申すやうなことは、云ふことが出来ませぬ

が、試みに、私の考へて居ることをこゝに述べて
見ましやう。

一、己の責任を盡すこと、誰でも日々己のな
すべき職分を有て居ります、則子供が學校へ行
き、よく勉強するのも、卒業後の令嬢が、家に
ありて、日々定まれる仕事をなし、父母長上に

奉仕するのも、主婦が皆に満足を與へて、よく

一家を料理するのも、皆其責任を盡すのであり
ます、其事の進歩不進歩は、元より其人の才能
の度によること故、致し方もございませんが、
只誠實に自分のすべき事を、出来る丈よく、し
やうとすることは、誰にも出来ることでありま
すから。之を人が見て、呉れやうが、呉れまいが、
賞せられやうが、誹られやうが、それには頓着
なく、心に満足し得らるゝ丈に勉むれば、自然

愉快になります、併し、もし其結果につきて非
難があるならば、それは方法によりては、よき
成績の上のもので、人が之を知て云ふのもあり
ますから、注意せねばならぬこと、あります。が、
之が爲、愉快の多分を失ふと云ふことはないと
思ひます。

さて、其職分を誠實に勉むるにつきましては、
一年の計は元日にありますと申す如く、一日の
ことも、朝起き上り、一通り、用意が済みまし
たらば、その一日になすべき事柄、順序及方法
につきて、大凡の考を定め置くことが必要で
あります、これは、一寸面倒のやうであります
が、目的のあることは、敏速に成就せしむること
が出来ますから、少しの休息の間に致して置き
たいものであります、又床に就きます前に、終

日其致しました事について、一考致しますことは、誤を再びせざる爲に、必要なることだらうと思ひます。

二、己を恕する心を以て人を恕すると、己を愛する如く、他を愛する人は誠に稀ぞありません、實に自分程大切にするものはありませんが、己の事ばかり考へて、他のことを考へざるのみか、かくして呉れそうなものと、考へるやうでは、人も同様でありますから、到底満足することとは出来ません愉快なる心にはなれません、彼の人はかくありたしと望まる、であらうと思ひやりて之に満足を與へ、愉快ならしめるやうと勉めますれば、誰でも、大抵一様の心を持て居るのでありますから、先方も亦其心を持て仕向けて参ります、則互に同情を以て、相

接し、相助け、相慰めるやうにすれば、人の仕向につきて腹立つこともなく、自分も己のなすべきことをなし終へて、誠に樂しいものであります、色眼鏡をかけて、人を疑つたり、少しのこととに腹立つたりせず、可成的、寛仁なる心を以て人に接することは愉快を得る爲には、最必要でありますまい。

三、或趣味を有すること。文學に技藝に、其撰むべき範圍は、非常に廣うございますが、少しの時間にても、如何なる場處にても得らるる如き種類のものにつきて、趣味を有することは、其人の爲に大切なこと、思ひます、假令一寸仕事と仕事の間に僅かの時間ありとせんか、其間に於て、讀書するとか、或はつひ、庭前に咲ける花の一枝をとりて之を挿すとか、盡

ある、得易き者を愛するの習慣あらば、無益のことを考えることもなく、其間に心を樂しましむることが出来ます。只徒然に、時を費すことは、誠によくないことあります。又其嗜好は可成的己の品致を高むるに便益あるものを撰ぶことは言はずもかなのことであります。

過ぎたる躰方

ふみ子

私は先づ、右の三ツ位で、一個人としても、一家庭内の一人としても、自分も人も愉快にすることが出来はすまいかと思ひますが、如何でありますやうか、皆様も御試なさつて御批評を願ひ度と思ひます。

近頃家庭教育のよひ聲がだん々高くなつてしまひまして、前よりも世の中の人が、これに注意する様になつてゐるりましたのは、まことに喜ばしい事でござります。

けれども廣い世の中にはまだ、家庭教育などには少しも氣をつけないで、ほり放しにして居る人もあります。またあまり氣をつけすぎて却て幼児がわるくなつて居るのもあります。

嘗て私の見聞した家庭の内にも、愉快そのなのと、不愉快そののと、ありますから、次號には其比較をして見ましやう。

また中には手本にしてもよい程、よい家庭教育

風ふけば川邊涼しくよる浪の
たちへるべき心地こそされ

をして居る人もあります。いま私は氣をつけ過ぎて却てよくない事について申します。

家庭教育と申せば、いふまでもなく、體をつよくすることも心や行を良くすることもはいりますが、只今は重にしつけのことに付て申します。

第一は我が子をあまりよい兒にしようと思ひ過ぎて子供不相當のことをさせてはならぬことでござります。牛肉は滋養物でございますが、この滋養物も、あまり多く子供にたべさせましたならば、幼兒はこれが爲に腹をわるくします。子供を育てる上にも、これと同じ様なことが澤山あるとおもひます。例へば幼兒は始終とんだり、はねたりして居るもので、何でも見たがつたり、聞きたがつたり、手をだしたがつたりするものであります。

それにむやみに行儀をよくさせようとおもつて静まり子供にさせる事柄は如何によくつても、させにせよなどといひておさへつけたり、丁寧な言語がよいと、大人のやうなもの、ひいかたをさせなどは其一であります。行儀といひ言語づかひといひ幼兒には幼兒相應の事があります、決して大人びたる言語づかひや、行儀をならはせる必要はありません、只に必要がないばかりでなく害があります。幼兒はとんだり、はねたり、何でも見たり聞いたり、さはつたりして、それで體や心が進んで行くものでござります。ですから活動を中心のは即ち進歩を妨げるわけであります。

また子供を從順にして親の恩ふ通りにさせようと思ひすぎてほつて置てよい事までとめたり、どうでもよい事まで命令するなども、よくありません。其他此の類のことは澤山ありますが、つまり子供にさせる事柄は如何によくつても、させ

方が過ぎては害になります。

第一は幼兒にさせるることは良いことであつて、

かつ幼兒相當のことであつても一時におぼくの事

をさせてはなりません。茲に毎朝起きかけに機嫌がわるくて、何時も床をはなれる時分になると泣

きます。さて、やつと起きると着物を着かへる

は阿母さんでなければいや、顔を洗ふのは乳母でなければいやなど、人嫌ひをします。また食事に

なりますと中途で席をたちます、口に食物を含み

ながら、おしゃべりして、こぼしちらします。斯様

なことがあるとしませう。これ等はみなよくない

事でござりますから斯様な子供を持つた阿母さんはこれもかれ早く直したいとおもうでせう。尙

外に出る時は両親だけにも挨拶させたいなど思つて此等の事を一時にしようとつとめたら、どうで

せう阿母さんはさつと失望します。其骨折は實に

大へんなもので其上幼兒は苦痛で結果が少うござ

ります。これとちがつて若し一つもしてまるり

ましたならば骨折は少なくつて幼兒は樂で、だん

／＼とよいくせがつります。諺に「急がばまはれ」といふことがあります、ほんとでございます。

右のやうでござりますから幼兒をしつけるのは

幼兒は幼兒らしくなる様にして氣永にしなければなりません。

眞ふた子に髪なぶらるゝ暑さかな

子供服の裁縫

岡本ちか子

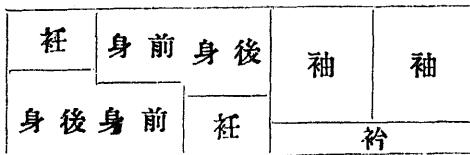
三ツ身單衣

三ツ身服は大抵二三歳より四歳位までの小兒の

着るものにして其用布は木綿幅一反にて二枚裁つ
と普通となす今左に其裁方積り方并に縫方にて記
れんとす。

幅九寸五分長さ一丈四尺の布を以て三つの身服の裁
方并に積り方

一、裁方の圖



一、裁切の寸法

袖丈 一尺四寸

袖幅 七寸

二寸五分

一尺八寸

六寸二分五厘

三寸二分五厘

一寸五分

前幅 四寸七分五厘

袖丈 一尺三寸五分
袖口 四寸
袖付 四寸五分

一、積り方

右の裁方によりて見れば木綿幅を以て三つの身服
を裁つには袖丈の四倍と身丈の三倍との切入用

なること明なり是によりて左の如き法を知ることを得

(イ) 袖丈と身丈とを知りて總尺を求むる法

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 3 = \text{總尺}$$

(ロ) 袖丈と總尺とを知りて身丈を求むる法

$$(\text{總尺} - \text{袖丈} \times 4) \div 3 = \text{身丈}$$

(ハ) 身丈と總尺とを知りて袖丈を求むる法

$$(\text{總尺} - \text{身丈} \times 3) \div 4 = \text{袖丈}$$

一、縫上寸法

袖幅 そでは
脇明 わきあけ
六寸五分

身幅 みは
七寸

前後共イツバイ

衽下 ねりした
三寸

衿下 えりした
六寸五分

衽幅 ねりは
イツバイ

一寸或は一寸一分

一、縫印付方

裁目を袖口となして向ふに

置き耳を袖付となして手前

に置き縫印をなす

| | |
|---|---|
| 後 | 身 |
| + | + |
| + | + |
| + | + |
| + | + |
| + | + |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 身 | + | + | + | + |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |

一、縫方順序 幷に縫方

袖、先づ表を見て縫代を成るべく淺く袖下を繕

ひ引返して裏を出し縫印の通りに袖下より袖口

明の印まで縫ひ折をつけ（左袖は袖口を右に持

ちて手前に返し右袖は向ふに返す）袂の角を留

め次に袖口をほそく三分位の針目に三つ折継と

なす。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 身 | + | + | + | + |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |
| + | — | — | — | — |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| キ | — | + | + | — | + | + |
| キ | — | — | — | — | + | + |
| キ | — | — | — | — | + | + |
| キ | — | — | — | — | + | + |
| キ | — | — | — | — | + | + |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| + | — | — | — | + |
| — | — | — | — | + |
| — | — | — | — | + |
| — | — | — | — | + |
| — | — | — | — | + |

ちて手前に返し次に脇縫をなし前布の方に折を

返し次に衽は衿下を三つ折縮になし置き之を身

頃につけ次に裾を三分の幅に五分位の針目に三

つ折縮になし次に衿をつけ衿先を縫ひ三つ衿を

入れて之を縮け次に袖をつけ、ふり、身八つ等を

二つ折縮になすなり。

(注意) 一つ身三つ身何れも前身頃衽付のところ裁目なれば單衣の時に限り袋縫になすは正しき法なれどすべて子供服は成るべく前幅衽幅等のひろき方着易ければ大抵の時は其裁目を小さくからげ置き別に袋縫になさずともよろしからん。

右は三つ身服普通の裁縫なれど其用布兩面物ならざる時は片身頃は裏となるが故にもし片面物なるときは必ず他の裁方によるべし左に片面物を以

て三つ身相當服の裁方一二二を示さん

幅一尺一寸長さ一丈四尺の片面物を以て三つ身服

一、裁方

一、裁方の圖

一、裁切の寸法

袖丈 一尺五寸

袖幅 八寸五分

衿幅 二寸五分

身丈 二尺六寸六分餘

後幅 六寸三分

前幅 四寸七分

衿幅 四寸七分

衿肩 一寸六分

幅一尺九寸長さ六尺八寸の片面物を以て三つ身相當服の裁方(但し袖は筒袖とす)

一、裁切の寸法

七寸

八寸二分五厘

二尺七分
一尺三分

身幅
裕幅

三寸五分
一寸六分

裕肩
裕幅

右二つとも縫印付け方、縫方等は普通の三つ身と

同様なれば略す

年ごとに遇ふとはそれぞセタの
ねる夜の數ぞすくなかりける

ました。

どういふわけでしよう?

二、或人の話に、其人が友人の家を訪ねますと、
友人の家の兒大凡七八歳ばかりならんが、駆け出

| 衿共 | | 衿 | 衿 |
|----|----|---|---|
| 袖 | 衽 | 衽 | 衽 |
| | 後 | 身 | 前 |
| 袖 | 衿肩 | 身 | 前 |

いつも考へものは御子供がたの御慰みばかりであるので、今度は阿母さんがたや姉さん方の御慰みに

て來り訪問者の顔を見るや否や聲高に「阿母さん
また來ましたよ來でもよいのにねー」と申しまし
たので、友人は怫然として歸つたと申します。

誰が子供にそんな事を教へましたらう?

時節なるを以て日常他と交際する事至て
少しだゞ一夜隔て入湯に行く某家の家
族のみ

或母の日記（第二回）

無名氏

生後四五六ヶ月間の記事

（即ち三十四年一月より三月に至る）

現今周囲の状況

住所 海岸小都會を距つる凡一里の田舎にして

積雪の中に埋まる住居は借宅にして宅に

は老婆一人なり

交際 前に述べたる如き田舎にして殊に積雪の

満三ヶ月頃よりして分らぬ言葉にて人に話する事
を始めしがしばらく中絶し又十五週頃よく頻りに
話をなせり朝未明に父母に先ちて目を醒まし安眠
を妨ぐる少なからざりき

因に云ふ十五週とは生後第十五週の意なり以

下之に同じ

第十八週頃より耳さとなり少しのせきばらいに
驚きて泣く其頃より赤き色を見て喜ぶやうなり
又しきりに手を吸はんとせり

第二十週迄は手に物を握らするとときは厭やがりて
泣きしが其頃より柔かなるものを握り放さるに
至れりそれより五六日を経て夜枕紙をさせて口に

入れ母を驚かせり

百五十一日目にて獨にて坐る事できたり

此頃より婦人と子供といふ雑誌を購讀せり

第二十二週に及びて母親を見知りたるやうに思は

る

咳拂ひと放屁する事は極大なり

三月十四日母と共に母の實家に行けり凡そ三日間

人の顔を見る毎に泣けり見覺ゆるに及びて泣かず
なれり祖父母其他の人々田舎育ちの人見ずと笑へ
り

第二十五週頃より小便をする事に馴れたり

看護法（承前）

醫學士 長瀬復三郎

（呼吸）これは一寸見ても、氣の付く事ですが、

通例生れたての子供、即ち初生兒から三年迄の子供は、腹呼吸をする、呼吸を營むに腹と胸とでする、胸が能く動くとか、腹が能く動くと云ふ事がある、三年以下の子供は腹呼吸ばかりやつて、子供の時は口より鼻で呼吸する、其呼吸の數は一分時間は初生兒は三十二乃至四十四が通例である、初生兒の呼吸を見るに見て居るだけでは判らぬ、胸に手を當てゝ數へれば數へられる、尤もこれは安息の時で、泣いて居る時驚いた時は是れより多い、それから三年からして四年になると三十五からして二十五位までに減ずる、七歳になると二十九から十八に減ずる、これより呼吸が促迫になれば胸に病氣があつて肋膜又は肺の病氣があると云ふ事が推察される其時は息使ひが荒くなつて鼻翼を動かして呼吸するから、顔見ても呼吸が忙がし

いければ何か病氣があると云ふ事の疑を起す事が出来る。

(營養)の事を簡単に言ひますと子供の營養は母乳を以てするが最も宜い事であるが、種々の場合に於て親の乳が出ぬとか、母親が疾病とか云ふ時は、母親の乳を離して他の物を以て養はねばならぬ場合には人工營養法、所謂天然營養法に代るに人工の營養法を以てせねばならぬ、それに一番宜いは牛乳、それから他にはコンデンスミルク、或は肉汁、種々の人の搾へた人工營養料、小兒粉と云ふものもある、さう云ふものを以て養ふて行つて、殆ど一年に達して子供は齒の成長が出来れば、少しの鶏卵の黄味或はヲモ湯とか、或は魚と云ふやうなものを試みて持つて行く、長く母親の乳を與へるは親の健康上にも害があり子供、十月の月が足らぬで八ヶ月か九ヶ月で生れた

供の發育にも宜い事でない。

斯う云ふ工合に育て上げた子供はどう云ふ疾病が一番多いかと云ふ事である、それを御話を置いて疾病的模様を言つた方が宜からうと思ふ、子供の疾病的統計と云ふものは、今ではまだ充分な完全なものはない、尤も年齢に従つて罹る疾病も同じでない、併し大體西洋の統計を見れば、疾病に罹る一番多いは第一年で、最も少ないは十歳から十五歳まで、ある、子供の死ぬのも統計から言つても満一歳までが多い、大きくなるに従ふて病氣に對しての抵抗力が備はれば備はる程疾病の數が少なくなつて来る、殊に健康を損し易いのは第一ヶ月、生れて初めの月と乳を離す時、一年の誕生が過ぎたと云ふ位な時です、それから早産の子供、十月の月が足らぬで八ヶ月か九ヶ月で生れた

子供の多く病氣に罹るは、一般に身體の弱い事、或は瘡せて居り又肺臟の萎縮して居る事、肺炎等隨分早産の子供は一般に弱いものである、月が満ちて生れた子供でも多くは消化不良鶯口瘡膿漏性結膜炎、(風眼) 黄疸、臍出血、或は破傷風など、云ふものが初生兒の病として多い。次に子供の第四週から第二年の初めまでに罹る病氣は腸胃加答兒とか慢性又は急性胃加答兒腸加答兒が一番多い、それは親達が可愛がる餘りに菓子を食はせ、或は不消化な物を食はせて見たり、或は不適當なる食料に原因する場合が多いものであるから消化機の病が多い、それから多いは呼吸器の病氣である、喉頭加答兒、氣管支加答兒、毛細氣管支加答兒或は肺炎、そ一云ふ呼吸器の病氣、第三番目に多いは神經系統の病氣、急癇即ち引き付け、東京

では虫と云ふ、腦膜炎、これにも種々あるですが急性の脳膜炎等が多い、又皮膚病も此時分には出るものである、濕疹、頭又は顔にくさが出来るとか、或は小臍胞疹等が来る、而して傳染病が二年の始までは少ないものである、罹つても麻疹、百日咳に罹るものが多い位で猩紅熱實扶的利亞などは存外少ないものです。然し今年は一年未満の子供の實扶的利を隨分多く見ましたそう云ふ事は稀でしよう。これから結核、これは此時は多いが急性の結核性脳膜炎であるとか他の微菌によつて来る脳膜炎もある、次に先天性的の微毒がある。子供も一年未満で多く現はれる腺病質瘻瘍が出来て居るとか云ふものは二年前の子供には少ない。第二年の初めから第六年の終りまでの子供は、多くは呼吸器の病氣が多い、それは子供が五ツ六ツになる

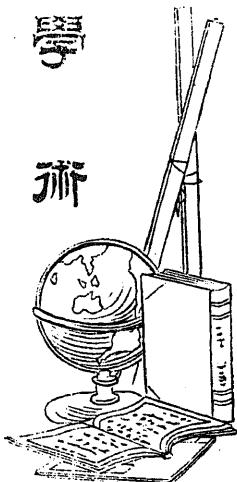
と外へ遊びに行き、寒い日にも學校に行くと云ふと外氣に觸れる事が多いからもある、消化機の病氣は第二番目位に居る、小兒の五六歳になると消化力が二歳位の子供より力が増すから消化機の病氣が少ない、傳染病は二歳から六歳までに多い麻疹百日咳、耳下腺炎、水痘、實扶的利、斯う云ふ

傳染病が此時期に於て多く現はるゝ、又腺病、首の圍りにグリグリが出來るとか云ふやうなものも二年から六年までの者に多い、神經系統の脳膜炎とか急癇は二年までの者に比べれば少ない、六年から十五年までの子供には六年になつて學年に達するものであるから所謂學校病と云ふものが起る、近視眼或は脊髓の側彎机が高いとか低いとか、身體の位置が悪くて起る、又頭痛、習慣性の衄血と云ふやうな病氣が多くなる、隨分學校の媒介によ

つて傳染する所の猩紅熱、麻疹、痘瘡、水痘實扶的利、百日咳と云ふやうなものが此時分には多くなつて来る、吸呼器系統の病氣にも隨分罹り易いが殊に肺炎、これには二ツある、クルブ性の肺炎は重い方である、これに罹るが多い、又肺結核も多い。

前述の事を一括にすれば子供の病氣に罹り易いは消化機の病氣が一番多い、何となれば子供の病氣の多いのは一年から二年の初めですからそれによつて見ても此時代の子供は消化機の病氣が多い、其次是呼吸器の病氣が一番に多い、傳染病は第三番目、第四番目に居るものである、比較的少なきは泌尿器の病氣或は心臟病である。大人と違ふて血行器病が少ないと泌尿器病、腎臟の病氣、膀胱の病氣と云ふものは存外少ない、四五歳の子供には

慢性の腎臓炎又は血液中の血色素が尿に混つて出る病氣等も無い事はないが、たゞ云ふ病氣は大變少なる。(つづく)



英語俚諺解(承前)

擊水生涯

On Income and Expenditure.

收入支出に關して

Better go to bed supperless than rise in debt.

Only that which is honestly got is gain.

借金をみて起立するより。夕食をこらえて寝床に入るに如かず。

Only that which is honestly got is gain.
たゞ正直なる所得のみ所得とするべし。

A man in debt is caught in a net.

借錢する人は、網に羅れる者とすべし。

It is hard to pay for bread that has been eaten.

食ぐて終つた人の代價を拂へば、困難なり。

Debt is the worst poverty,

借金ば、贋體の貧乏なら。

If he is rich enough who owes nothing.

何より借りな人せ。十分に富める人なり。

The greatest wealth is contentment with a little.

最大の富也。僅を以て満足する人なる。

He who ashamed of his poverty would be equally proud of his wealth.

口に金を藏ねば、又其富を誇る者なし。

Money is a good servant, but a dangerous master.

貨幣は僕にしては善し。主人にしては危険なり。

A penny saved is a penny got,

一錢を節約したる也。一錢を儲けたるなり。

According to your purse govern your mouth.

汝の財布に依へし。汝の口を支配せよ。

An empty purse frights away friends.

空囊は友を驚かし去る。

He that buys what he does not want must often sell what he does want.

要らぬ物を買ふ人は、時々要らぬ物賣らる。

シカド。

Who heeds not a penny shall never have a pound.

人より一念忽にあら者は、遂に一生懸念を有す。

ロジカル。

A bad thing is dear at any price.

おしゃれの也。如何なる代價なしにても高き。

Where treasure is there the heart is.

財のある所心、心ある。

Cheap is dear in the long run.

安物也。永く競走に於ては高價なり。

Grasp all—lose all.

凡ぐてを得んとする者は、凡てを失べ。

He who loses money loses much; he who

loses a friend loses more; but he who loses courage loses all.

金を失ふ者は、多くを失なふ者なり。友を失ふ者は悉くを失ふ者なり。

Ask the purse what you buy.

買へば財布と相談せよ。

Waste not.

浪費やむべし。欲かるべし。

The most important element in success is economy—economy of money and time.

成功の要素は、經濟なり=金と時との經濟なり。

No possession, but use is only rich.

所有するべし。使用するべしと富なり。

A light purse makes a heavy heart.

軽い財布は、心を重へむ。

From saving comes having.

所有せし儉約より来る。

A man's purse will never be bare, if he knows when

To buy, to spend to spare.

買へば、使用すべし、節儉すべし時を知る人の財布は嘗て空くなることなし。

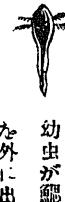
蛙の話

東海生

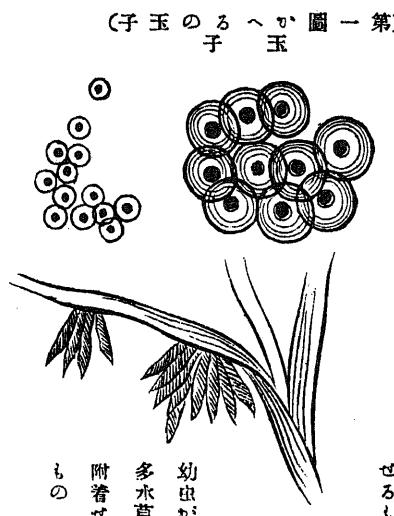
春夏の候水田の間を散歩して見ると蛙が澤山群がりて聲をはりあげてないで居る、其のなくしがは大層喉をくすぐせるのである、あのなじて居る蛙わ誰でも能く知つて居り又見ることあるだし

よーけれども蛙の小どもわ、どんな形をしてゐるだろーか親蛙と同じ形をしてゐるのであるか、又親と全く異つてゐるかとゆーことわ知らぬ人が多

玉子の中に幼虫の居る圖



幼虫が鰓
を外に出
せるもの



(子) 玉子の玉 第一圖

いだろーと思ふ。

蛙わ春に水田で卵を産む、卵の形は圓くつて大

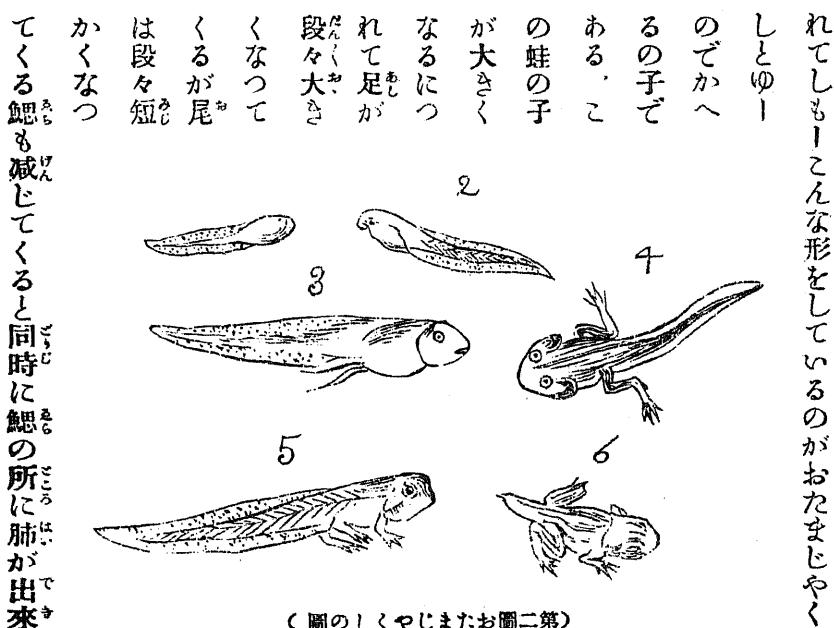
豆位の大いさである、そして卵の周圍にはねばねばする透き通つて見える厚い皮がある。其の皮の中に包まれてゐる卵は半分わ黒くつて半分わ白になつて白い方が下になつてゐる卵が日數をふると黒い方が段々殖えてきて白い方は段々減つてしまいにわ小さな點になつて終には其の點も無くなつてしまもー。

卵が今少し生長すると今度は横長い蛙の子ができてくる、此の子がそろそろ卵の皮を破つて水の中え出て丁度魚の様に水の中をあちらこちらと泳ぎまわつて都合のよい草の葉や石などがあると胸の處で何足も一所にくつついてしまもー。

此の時には蛙の親とは大變差つてひますので聲を出して鳴くこともできず、足がまだできないで

すからはい廻ることもできませぬ。其の代り親には尾はないけれども此の子には體に比べて随分大きな尾を以つてゐるので魚の尾と同様に夫れを動かして水の中を自由自在に泳いでまわる、夫れから親は陸にいて空氣を呼吸してひますから人間や毛ものゝ様に肺で呼吸致しますけれども子は水中にいて水を飲み込んだり吐き出したりしてゐるのですから肺とは差つた處の魚の持つてゐる鰓といふものを持つてゐる此の外に追々眼ができてくる、耳ができてくる、夫れからはなもできてくる。

子どもの時の鰓は外に出ているので能く見ることができるとが、できるが子どもが段々大きくなるにつれて小さくなつてきて能く見えぬ様になつて來て終には全く見えなくなつてきて鰓は體の兩側に包み込ま



(圖のしくやじまたお圖二第)

てくる。

魚が無くなつてきて肺が出来ると人間と同じことですが、から水の中で呼吸をすることができるのでは是非なく永く住みなれていた沼の中から陸の上にはい上つてくる。しますと鰐わ不用になつてきりますから遂に無くなつてしまい、尾も陸では別段役に立ちませぬので無くなつてしまふこんなになると親の形に異らないものができてくる。であるから之れからわ別段之れぞとの一変化がなくつて親と同じ大きさになるのである蛙の子が水の中を泳いでいる頃のものを幼虫といひます、そして陸にはい上つて親と同様の形になつたのを成虫といふのである。

蛙は子どもの時には草ばかりを食つていますが後には昆虫や蚯蚓の様なものを取つて食べ、蛙の

物を食ふのは人間など、は差つて面白い食い方をする虫な

どが目に
かゝると
長い舌を



目で見る

ことを得

ない位速

に出し其

舌にて虫

に粘着し

て取るの

である、

其の速さ

の早いのは非常なもので餘程よく見ていないと舌



(圖ふ食を虫るへか圖三第)

を出すのさえも見ることを得ない位である。

蛙には色々の種類がある足の指の先きが尖つているのがある圓くなつてゐるのがある、指の間に泳の役に立つ膜を以つてゐるのがある、又以てしないのがある、體の色にても黒いのがある、赤いのがある、青いのがある夫れから黃色のがある其の外他の國にはさまざまの色を以つてゐる蛙が住んでゐる。

種々蛙のあ

る内で子ども

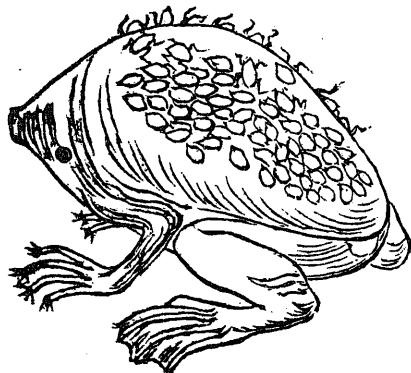
をそだてるの

で一番面白い

のは「ビバ」

との一蛙であ

る之れは日本



(圖のびび圖四第)

にはいない南亞米利加といふ處に居るのですが此の蛙は雌が卵を産むと雄は此の卵を雌の背の上にくつづける、すると背に高い所と卑い穴が數多できてくる其の數は七十か八十位あるそうです、卵が此の穴の中に入つてから八十日位すぎると幼虫は獨りで動ける様になるので穴から飛び出て草の葉や石に附着して夫れから段々生長して親と同じ様な形になるのは前に述べたと同じである。

(完)

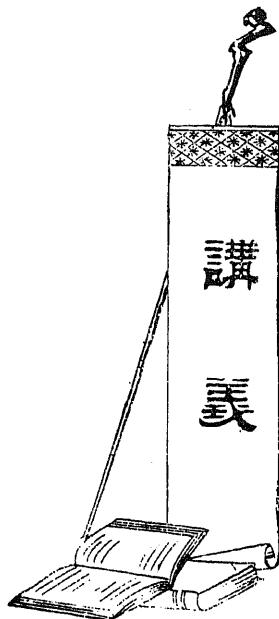
手をついて歎申し上ぐる蛙か那



育兒學（續）

中村五六

○睡眠、幼兒生れて後一二ヶ月の間は、食物の消化と、營養とに、全力を費してゐますれば、つまり外より見る所では、眠ると乳を飲むとの二様の時間の外はなきことになります。漸く月日を経て、感覺意識働き、始めて、醒めたる時もあるやうになります。故に此の時代にありては、睡眠に費す時間、又最も睡眠に適する時刻などの



注意は、餘り大切ではありませぬから、唯其の眠る位置と状態につき、心得べき事柄を申し述べませう。

幼兒は最初より幼兒自身の寝床に臥さしめ、殊に寒き折には、十分に被物を覆ひ置くの注意が必要です。被物は軽く且つ暖かなるものにて、室内的溫度に應じて、之を加減すべきは、申すまでもなきことであります。

我が國には幼兒を暖かに保つためとて、母親が添ひ寝をいたす習慣がありますが、幼兒は自ら體温を保つだけの力を持ちてゐますれば、被物さへ相當であれば、それには及びませぬ、しかのみならず不潔の空氣を呼吸し、又老人の添ひ寝などは、却て幼兒の温を奪ひて宜しからず、且つ此の習慣續くときは之がために、母親などは、空しく時を

費すの弊を生じます、よりて、獨り寢の習慣をつくるは、種々の利ありて害なきことであります。

睡眠中は餘り明り過ぎても宜しからず、又空氣の流通はよくすべきなれども、風の吹き通す場所は之を避けなければなりませぬ。

睡眠時の長さは、已に申したる通りの次第なれば幼兒は唯乳を飲むために醒め、飲み終れば再び速に眠ります、諸器關が段々發達するに従ひて、活動の欲望を増し、眠る時間を減じますのが通例です。此等は天然自然に出づることでありますれば、母たる人の任は、よく注意して唯他より睡眠を妨げざるやう務むのです。

既に眠る時と醒むる時との區別があるやうになりますれば、其の時は、成るべく規則正しかるべきことは當然なくてはなりませぬ。一體に動物は

此等の時に關して實に規則立ちたるもので、各一定の時刻一定の時間眠るものであつて、人間程に亂雜の眠り方を致すものは多くはありませぬ。

睡眠不規則がちなるときは、母も子も、夜中よ

く眠る能はず、又健康に必要な休息をなすことが出来ませぬ。幼兒は眠り醒めたるとときは、晝にても夜にても、乳を求めて泣き出すが多くあります、其の泣くのを休めしむるために、空腹であるなしに拘はらず、常に乳を與ふるときは、必要な眞の休息とはなりませぬ。然るに一度泣く毎に乳を與ふる習慣をつくるときは、母の安息快樂のは、幼兒の健康平安と共に見捨てねばならぬことなります。乳を與ふれば、無論一時幼兒を静むるの利ありといへども、後日十倍の面倒失望の損あることは明かです。

哺乳睡眠時を正しからしむるやう務むる間に
も、夜分は特に定まる睡眠の時なれば、此時に
眠を妨ぐることなきやう手順をなし置くこと肝要
です、幼兒は年月を積み身體も強くなるときは、
此等の注意は猶更のことなります。齡二三年ま
での幼兒は、夜眠のみならず、午睡を要するもの
でありますれば、晝の真中に二三時間眠る習慣を
つくること肝要です、午睡の時刻後るゝときは、
多くは肝腎の眠るべき夜分にも、宵の間はよく眠
られざるとありて、其の身に害を及ぼすのみなら
ず、他にも迷惑を掛くることになります。神經質
の幼兒には、三四歳若しくは其以上の齢に至るま
で、適當の午睡は特に効益を與ふるものと申しま
す。

晝にても夜にても、幼兒が眠りたるときは、光

と響とは避くべきものとなりてゐます、たとひ、
眠を醒すほどでなくとも、神經に感動を興へます
れば、熟眠を妨げ、元氣回復すること出来ぬもの
であります。然るに多くの人は、これに違反せる
行を致しまして、幼兒が目を醒さざるかぎりは、
其の傍にありて、喋々話をすることも、がた
がた響を起すことも、決して何等の影響なきもの
と思つてゐます、これは、有害なる誤解といはな
ければなりません。

食物胃中に満ちて、今や消化始めんとするとき
の睡眠は、不穩なることは當然のことであつて、
時によりては全く眠り得ざることがあります。そ
れであるから、幼兒に十分に乳を飲ましめて直様
眠らしむべからざることは、一般的の規則となりて
ゐます。生れて後一ヶ月ばかりの間は、乳を興へ

て直に眠ることは、よくあることです、この時代にありては、一時に飲む乳の分量も極めて少くありますから、さほどの害はありません、豫め注意を要するのは、それより後の時代です。

幼兒睡眠の時間は、各兒の身體の組立、健康に關係しますれば、一定の時間を示すことは出來ぬ位ですか、眠れること靜にして、醒めたるときはおとなしき折には、取扱上大なる過失なきものと認め、同年配の他兒に比して、猶一時間多く眠りとか、少く眠りとか心配するに及びませぬ。之に反して、眠ること靜穏を缺き、醒めて泣き、又はぢれるなどのことあるときは、食後直に眠らしめとか何とか、取扱上不注意の廉わりしことの保證が出来ます。

母親を苦しめ、乳母を煩はることは、幼兒の眠

らざるに越すものは餘りありません。故に如何にもしてよく眠らしむる方法を得たいのは、皆望む所であります。健康なる幼兒は、其の取扱適當なるときは、常に相當の時に眠るものであります。若しく氣高ぶりて休まざるとときは、斯くなしたる原因あること認め其の原因を見出し、之を際く工夫を致さねばなりません。若し又、之を見出し得ざるとときは、健康を損じたるものであつて、眠らざるは病苦によると認めて相違ありません。此の場合に於ては、早く醫師の忠告を求め、健康を回復する方法を取るべさせます。よく眠らざるとて薬品を服用せしむるが如きは、斷じて禁ずべきとてあります。花又は其の他の強き香を有するものは、幼兒の神經を刺激して却て害あるものであります。

寝具は之を清潔にして、幼兒の床を離れたると
きはよく之を空氣にさらし、又時々日光にほすこ
とは、幼兒の健康を増し安眠を得しむる有効の方
法なることを忘れてはなりません。

靈棚の奥なつかしや親の顔

兒童研究法

文學士 松本孝次郎講演

兒童の視覺

先づ子供の視覺と云ふものはドウ云ふ原理で發達する者であらうかと云ふ一般を心得て置いて、それから研究上の注意、研究法の問題と云ふものがよく其意味の判るやうになつて來るものであります、先づ最初に私は子供の視覺の事に就ては初め

て生れた子供は半ばは盲目的のものである。能く見えない、さうして凡そ七八歳頃までは幾分か遠視的になる。それから七八歳頃から通例になる。一般の教育を受くるやうになつてから、近眼になりますが、近眼になるは十歳頃からソロヘ始まる。大體よりはさう云ふ變化を経て來るのでありますか、此變化は大凡ドウ云ふ有様で進んで來るかと云ふ事を初めに御話を仕やうと思ふ。それで初めに自分からする事であらうが、歩く事でも耳で聽く事であらうが皆経験を経て一人前の働きが出來る。物を見るに云ふ働きも矢張経験の結果として起つて來るものと言はねばならぬ。初め三月ばかりの間は視覺が完全なものになつて居らぬ、それまでの間は何かがあると云ふ事は判つても、物體を辨別すると云ふことはできぬ。眼に着き易き

ものを見せて、三ヶ月頃迄の間は、其物に眼を着けて物體の動くと共に其物を見て行く事は出来ない。さうかと言つて餘り光線が強くあれば、眼を害せられて、或も強い光線を見て行くと云ふ事は出來ない。其處で世間でも能く言つて居るやうに生れ立ての子供は光線が好きであるか、嫌ひであるかと云ふ問題が起る、子供を研究致した人の中にもこれには種々説があつて一致いたしませぬが、此點に兒童の事を觀察して獨逸の哲學者のヘーデマンと云ふ人の觀察によれば、子供は初めから光線が好きであると云ふ觀察を書いて居る。佛蘭西のリボーと云ふ人も光線は好きだと言つて居る、其反対の方は生れたての子供は光線に出逢へば眩しいと云ふ感じがあつて眉を顰める、光線を嫌ふと云ふやうに結論した人もある。佛蘭西のイ

スキ、ブライルなどはかく主張して居る、其他にもさう云ふ論を言つて居る人がある。それに就ては吾々はドウ云ふ風に考ふべきかと云ふに、勿論觀察する子供の發達の程度に依る。壯健の子供ならば割合に發達して居る。不完全の發達の子供ならば眼も能く發達して居らぬから、眼が光線をよく受取るやうになつて居らぬ。能く發達して居る者でも光線の分量が何の位であるか、或時は眩しい感もあるらうし、或は光線の度合に依りては感ぜぬ事もあるから健康と光線の刺戟の強さによつて極まるのであつて唯一概に光線は好きとか嫌ひと云ふ事は言ひ難と思はるゝ。唯其時の様子、光線に初めて對する様子はドウ云ふものであるかと云ふ事を大凡考へて見る事が出来る。それは暫く暗い處に居りました後ち表に出て光線に逢ひ、或は

生れながらにして眼の水晶體の中に疊りがあつてそれが爲めに能く見えんて居つた者が、治療に依つて其濁つた物質を取去るれば、初めて其處で見えるやうになる。さう云ふ場合に於て生れて初めて光線に出逢ふ。其時は矢張眩しい。寧ろ苦痛と云ふ場合である。さう云ふ場合を考へて子供の場合は推測すれば多分眩しい、一種の苦痛であると云ふ方が眞であらうと思はる。要するに一番始まりに於ては眼の生理的の機關はドウしても不充分不完全である。始め數週間の間は眼瞼の運動も左右が一様に行かぬ事がある。右の眼を明けて左を眠り、或は左を明けて右を眠り、兩方一緒の運動を執れぬ事がある。眼の運動と眼瞼の運動が一致せぬ事がある。兩眼の運動が一致的の動き方をせぬ事がある。成人の觀察に依れば手を以て生れ

たての子の前で動かしても瞬きをせぬと云ふ感じの薄い事もある。眼を開いて適當に物を見、又外界から物が来て眼を保護する爲めに閉ぢなければならぬと云ふ眼の働きに就て適當なる處置が出来ぬ。段々月日をたつと右の眼と左の眼が一致した運動をするやうになる。左右の眼が相調和して働くやうになる。今此處に一の物體がある。それに對して兩方の眼で其物體を見ると云ふ事も初めの間は完全に出來ぬ。若し右の眼の方が此方の物體に働いて居て、さうして左の眼の方が之れに向つて充分働くかねば此物體の距離を知る事も出來ぬ。有名なるブライエルの話に依れば初め一週間は一緒に動かぬ、三ヶ月目になつても屢々左右の眼が一緒に動かぬやうな場合もあると言つて居る。其處でそれならば動かぬ所の物體を認めるとき運動

して居る物體を認める、と何方が見易いと申しますと、これは餘り早く動くものは認められぬ。併し動かぬものより動くものが早く認めらるゝ。動く速力は時計の振り子位のものが一番早く認めらるゝと云ふ事になつて居る。只今の話を脳髄の方から考へても生れてから二ヶ月程後でなければ脳の働きが完全にならぬ。これはドウしても脳の廻轉がまだよくできぬ。さう云ふ所から初めて眼が光線を受けるやうになつて居ても今來たものは、ドウ云ふ光線があると云ふ事を判断するには、脳の不完全な所から見ても、先づ二三ヶ月の後まで本當に判らぬと云ふが事實のやうである。然らば物體を認めるやうになつた時分には最初には色を認めるか、形を認めるか、何方であるか。此疑問に就ては勿論初めは色の方を認みると云ふが事

實であります。形よりは色に就ての知覺の方が早く發達する、それから色はドウ云ふ色が早く認められるであらうかと云ふとこれにはドウも實驗の結果が二通りあるやうであります。一方は赤い色と云ひ、モウ一方は黃い色と云ふ。又この外別の色と云ふ人もゐるが、多くの學者は赤とか黃色とか云ふ説である。種々色の内でも黄と云ふ色は光輝（光澤）の強い色であるから、早く認められるのであると云ふは説明し易い。赤い色は黄に續きての刺戟の強い色である。單に刺戟と云ふ點から言へば黄の方が一層強いやうであるから、黃色の方に早く注意が行つて、早く認められると云ふらしい。けれども人間の眼の網膜は眞ん中が赤い色に早く感ずるやうになつて居る。其部分が一番早く完全な發達をする。然らば網膜の性質上、赤

色に向つて早く感ずるやうになるから赤い色を早く感ずるであらうと云ふやうに説明も出来る。事實は何方であるか決斷する事は出來ぬが、其説明の理由は今のやうな事で幾分か解釋が附くであらうと思ふ。それ故に學者は屢々野蠻人の研究とか、同く文明人の中でも教育のある者と無い者の比較とか云ふ所から材料を探りて發達せぬ人間は刺戟の強い光線を好む。そう云ふ所から子供と人種の發達の上には同じやうな點があると云ふ結論が出て来る。初めには色が認められる。其次は形である、これも大凡四ヶ月位から認められると思ふ。四ヶ月後位から人の形を認められる實例がありますから此方は四ヶ月位と結論して置いて宜い眼の方は色が見え、又形が見えると言つても人の眼は奇妙なものであつて、眼が屢々誤つて物を見

ると云ふ事が能く有る事である、さうして其誤つて見ると云ふ事のあるのは普通の人間に免れぬ所であつて却つて誤つて見るが當り前、さう云ふ現象、「イリュージョン」と云つて、幻覺と稱して居る。此幻覺と云ふものも何時頃からあるか。幼稚園などでやつて居ります所の紙を折り合はす遊びに於ても、幻覺が現はれて居るは確かであれども、子供がそれを發見せぬやう、ありますから、さう云ふ所から考へれば精神が幾らか發達してからでなければ其現象が判らぬやうである。

凡そ視覚はドウ云ふ所から不完全になつて来るであらうか、重なる原因は光線の不充分と云ふ事と其子供の讀んだり見たりする印刷物が、餘り細かなものを見ると云ふ事、又身體の位置の宜しくなく、身體と見て居るものと餘り近過ぎ、或は餘

り遠過ぎ、又首巻の餘り堅きために適當に見やうと云ふ時に自由に動かず、餘り眼をこすつたとか、或は煙草を餘計に吸んでそれが爲めに悪くなる事、其他神經系統の病氣の爲めに眼の悪くなると云ふ事が不完全になる原因である。又學校の教授用具は不完全な所から屢々眼の働きに缺損を起す事がある。外國の例を取れば外國には塗板も白い板が宜いか、黒い板が宜いか、石盤の如きも白石盤が宜いか、黒石盤が宜いかと云ふ問題になつて居る。現在は黒い「チヨーク」は手の汚れる事もあり。此方は排斥せられて黒板が用ひられて居る。石盤も黒い石盤が勢力を有つて居る。

又地圖も種々の色で彩りてある、種々の線もあつて眼を勞らすものと見て居る。故に地圖を採用するにも注意をして採用し、地圖を見せる時間の

長さも注意せねばならぬやうになつて來る。又年段々研究されまして喧しく唱へられて居るは習字の文字の書き方であつて、外國では斜めに書く書き方と、眞直に書く書き方とあつて今では眞直に書く方を廣く用ひて居る。斜めに書くはいかぬと云ふ事になつて居る。

低く出で人に親しや夏の月



野村望東尼

(つづき)

下村三四吉

余は、前回に於いて、望東尼の京都行きまでの事

を叙べき。望東尼が京都に赴れしは、文久元年の末なりしが、それより、柳櫻(やなぎさくら)、こきよせて錦なせる都の春を過ごし、新樹翠滴る頃に及びぬ、唐代の詩人杜甫はいへり、「時に感じて花にも涙を濺(なみだをせ)ぐ」と。望東尼が當時の感懷は、實にかくの如きものありしならん。五月雨暗くして、杜鵑のしさりに血に叫ぶをきゝつゝ、彼は、再び行裝を理めて、郷里に歸りき。

望東尼は、少々より一わたりの書史にも通じて、尊王の大義をわきまへ、前にもいへるごとく、己(おの)が名をさへ望東とつけて、その意を寓しけり。この人にして、半歳の日子を京都に費したれば、感奮せるところ、思ふに少なからざりしなるべし。京都は、政治の中心たらざること、久しきに亘りしといへども、さすがに至尊の在ますところに

して、九重の奥ゆかしく山や水や、すべて歴史の色を帶びつゝ、一種の感想をひき起すの材料ならぬはなし。まして、當時、幕府はその失政のため、天下の非難を被ふり、勢力次第に衰運に傾き、尊攘の志士は京都に集まりて、國事に奔走し、活氣甚だ盛んなりき。もとより尊王の熱情に富める望東尼は、此等の人士に接し實況を目撃せるより、その性行にやうやく義侠勇烈の風を加へ來れり。時勢の變遷は、しばらくもその歩をとどめず。和宮の關東に降嫁あらせられしより、公武の合體は、形式にこそ表はれたれ、その實は全く舉らざりき。かしこくも、主上は「うたでやむ時ならなく、唐衣いつまであだに日を過すらん」と憤らせたまひしかど、幕府はもとよりこれを實行するの力なし。望東尼が福岡に歸りける年、即ち文久

二年十月、將軍家茂に詔して、宜しく収旨にしたがひ、速に攘夷の策を決すべきことを命じたまひぬ。

時に、薩長土の三藩主は、關下鎮撫の命を受け、その威望天下に重かりしが、中にも、長藩は尊攘黨の主盟たるが如きさまにて、京都に於ける論議は、多くその左右するところなりき。かくて、三年の春に及び、將軍家茂は朝命によりて上洛せり。

天皇これを機とし、四月十一日男山に幸し將に八幡の祠前にて攘夷の節刀を家茂に賜はんとしけるに、家茂疾と稱して出でざりき。浪士等これを憤慨して、遂に天皇の親征を請ふに至りぬ。家茂已むを得ずして、勅を奉じ五月十日を以て攘夷の期となし、偏く諸侯に告げぬ、長藩の如きは、この命を奉じて、外艦を下ノ闕に砲轟し、朝廷の優賞

を被ふれるほどなりき。

かくて、攘夷説の潮勢は、將さに天下に張らんとせしが、八月に及び、薩摩、會津二藩の連合策のために、朝議急に變じ、長藩士は、禁門の警衛を解きて京都を逐はれ、尊攘説を主張せる三條實美以下の七卿を奉じて本國に走りぬ。七卿の官職は削られ、つぎて長人の入京は禁ぜられぬ。これより攘夷の事や、緩みき。

明くれば元治元年の七月、長藩の家老福原越後等、陳情のために兵を率ゐて入京し、會、薩の守兵と戰ひ、飛丸宮闕に及びぬ。蛤門の戦といふものこれなり。長藩はこれがために、朝敵の名を被ふり、幕府は尾張侯を總督として、長藩を討たしむ。

然るに、長藩は、罪を謝して、恭順の意を表し

ければ、戦を交ゆるに及ばずして、總督は征討の師をかへしぬ。但し長藩に奔りし三條公以下の五卿は、幕府の命により、筑前太宰府に移されて、拘禁の身となりき。時に元治二年（即ち慶應元年）正月なり。

慶應元年には、望東尼は、齡すでに六十に達せり。しかも、勤王の志は、老いてますます盛んなり。尊王の事に心力を盡されたる五卿が、福岡よりほども遠からぬ太宰府の地にさすらひたまへるを聞きける彼れは、悲哀の情に堪へず、その二月廿五日太宰府の天神に詣でし次第を以て、密に請うて五卿に見え、起居をうかがひまつりぬ。このをりの有様は、望東が知友に寄せたる手簡中に詳かなければ、左に引かん。

この二十五日、まうで侍りたれば、ありがたく

も御前にめさせられ、いといとねんごろなる御ものがたりをうけたまはり、誠に誠に生けるかひありと、身の幸は此上なく侍るものから、御代のみだれよりかゝる鄙にもうつらせたまへるなど思ひ奉れば、墨染の袖かわく間もなく、御いらへだに聞こえまつりがたかりつれど、心をとりかへ、かしこくも、問はせたまふことども、かれこれきこへ奉りて、なむ御つつしみの折からなればにや、御まゆづみも、御はぐろもせませたまはで、御衣もただに御袴ばかりまゐりたる御さま、いといとかしくもあはれにおはしますになむ。五卿の御中にも、ことさら三條の君めでたき。御向ひすぐれさせたまひ、女にしては、紫が書きたりけん源氏物語しのび出でられ、須磨の浦やここならんと、あやにたゞら

望東尼が忠誠は、十分に五卿たちを認められぬ。その六十の賀をものせしにつき、三條公より「すくこのらん」との歌をたまはりけるが、望東は「老が世をちとせとおほせし宮人に、あまる齡をささげまつらむ」と答へまつりぬ。前文と相映發して、餘情掬すべし。

(つやく)

あづさ弓ひくかずならぬ身ながらも
をもひいる矢はただに一すぢ

(望東尼)

れ侍りてなん。皇國の有志はさらなり、たれ人か、彼の君の御爲に、いのちをすてざらん。誠に誠にかなしきめを見奉るものかなと、その後は、ことさら御歸京とくもならせたまふやうに、神かけて祈りまるらすばかりになん。都のとのにつれづれと待たせたまふらん女君がたの御心さへ、おしはかり奉り、かなしうも、あはれにも、忘るゝひまなく思ひ奉るぞかし。

純潔なる忠誠と、深厚なる同情とは、溢れんばかりにて、これを表出するに精緻流暢なる文藻を以てし、委曲悲惻の趣致を極め、眞に至文といふべし。されば、この一書は、ただに望東か五卿にまみえし當時の情況を知るべきのみならず、これによりて、望東の人物如何を想見するに餘りわらとす。

ローランド夫人傳 (つやく)

鄭越生補譯

議院内の暴舉忽ちにして市中一般に傳播しければ、ジャコビン黨人は勿論、放逸無賴の暴民一時

に蜂起して所在掠奪を縱にして子女を辱しめ、狼藉至らざるところなし。

かくて五月三十日ギロンド黨員は一同死を決し

て議院に登る、途上の市人側目耳語して曰

今日こそ彼等の末期なれ、

蓋しジャコビン黨人は、是より先計を定め、

此の日を以て陰謀決行の日と期したればなり。」

然れども幸に此の日及び翌六月一日は、何事も

なく打ち過ぎぬ、正に之れ山風將に襲ひ來らんと

して四面先づ寂然たるものか

果然六月二日市中俄に騒然、警鐘頻りに來り、

黨人東西に奔馳す。

此の日ジャコビン黨人は武裝をなし兇器を携

へ、領袖マラーの下に集合す、マラー壇上にあり凜として曰

機熟せり諸君願くは旗を力めよ、

夕景議會開會の勢頭ギロンド黨の首領ランジュー

子一起立して曰

何の權利に基づきて反對黨は此の如く正義を蹂

躪するか

と慷慨壇を打ちてジャコビン黨の近時を博擊し言甚だ痛快を極む、之に於て議場俄に喧擾、ジャコ

ビン黨員先を争ひて反對演説を試みんとす。

此時遅く彼時速く、マラーの率ゐたる一隊、院

内に突入す、紛擾又た紛擾……

紛擾の中何事か可決せられぬ、可決せられたる

は抑何の案ぞや、案に曰

左に列記せられたる議員は、有罪の嫌疑あり直ちに捕縛せらるべし。

而して列記せられたる議員の氏名二十二、悉くギ

ロンド黨員たるは云々迄もなし。

是より先きヴィアードなる無賴者あり、ジャコピン黨員の旨を受けて、ローランド夫人を罪科に陥れんとし内亂の罪名を以て夫人を告訴す、議院（當時議院にて國事犯罪人を糾問し宣告したり）即ち夫人を召喚し式の如く姓名を問ふ、夫人微笑して曰

ローランド、予はローランドと自稱することを誇るものなり、何となればローランドとは善良にして名譽ある人の名稱なればなり

と、此の時院内静かにして水を打ちたるが如く萬目悉く夫人の身に集る

既にして審問長問ふて曰
夫人はヴィアードなる者を知り給ふか

夫人曰

彼は二回予に會見を要めたり、予は一度彼に面會を許したり、其の時予は彼が卑劣なる間牒にてありしことを看破せり、即ち其の卑劣なる彼の心性に相當すべし侮辱を彼に加へて速かに退去せしめたり

と此の他問ふところあれば即ち答ふ、言簡にして明徹、些少の穏秘なし。

かくてヴィアードの告訴全く讒誣なりしこと明了なるに至りたれば、審問長は證據不十分の廉を以て夫人を釋放するの旨を宣告す。

夫人釋放の宣告あるとともに拍手急霰の如く院の外に散る、蓋しジャコピン黨員は如何にもして夫人を罪科に陥れ、以て敵黨の一大勢力を挫折せんとし、百方苦肉の策を講じ、竟に夫人を院内に審問するに至りしことなるに、却て夫人の釋放せ

したるを喜び、而かも拍手夫人を賛嘆するもの
は何ぞや、夫人の崇高なるに感じたればなり、夫
人の凜烈たるに威伏したればなり

讀者よ想ひ見よ、必らず夫人を罪科に陥れんと
する豫期を以て審問し傍聴せる反對黨人……狂亂
せる而かも一點の涙なき鬼の如き石の如き……を

して心ならずも無罪を宣告せしめ、吾れ知らず拍

手せしむるに至りしといふ夫人の風采が如何に崇

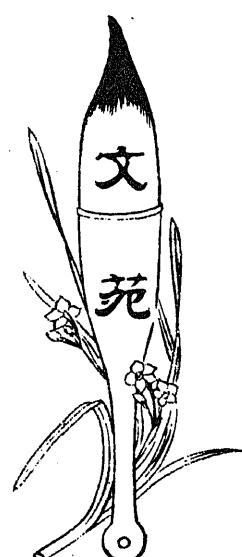
高なりしかを又如何に其の意氣凜烈たりしかを、
夫人拍手を背に聽なし悠然一揖して院を去る、

ロベスピア目送して曰

大なる哉

萌え出るも枯るゝもおなじ野邊の草
いつれか秋に遇はではつべき

若葉のみしけれるかけをそこはかと
なに、うかれて蝶のとふらん



新樹

梢みな若葉になれる庭のともに

また色あせぬわか楓かな

寄山祝

高砂の鳴山とほく日のみ旗

同人

中嶋歌子

夏蝶

徳大寺治子

花間競争舟

田中みの子

夢後子規

中村禮子

六十

敷島の大和こゝろもみゆるかな

はなの木かけをもそふ小舟に

子規をちかへりなくこゑすなり

ゆめに聞しもまことなりけん

夏植物

同・人

深山新樹

木原庫子

もろともにすゝまむ人はなけれども

うゑてやみまし花の夕かほ

瀧はおとのみ聞えけるかな

巡査

天野瀧子

蚊遣火

箕作光子

更るよも絶えずひゝかすくつ音に

やすくねらるゝみよぞうれしき

夏しらぬわか山まとも蚊遣火の

けぶりいふせき夕まくれかな

竹亭夏月

佐藤つや子

月前聞子規

關 藤子

わか宿の竹の葉末におくつのを

折みする月のかげかな

さやかなる月の光にあくかれて

子規さへなくよなりけり

新樹風

中村禮子

同

竹屋つね子

まかねちをはしる車のおと絶て

かぜこゝちよき朝ばらけ哉

更行月になくほとゝうす

國旗

竹屋つね子

時鳥

寺島とく

軒ごとにかゝけていはふ日の御旗
くもらぬみよのしるしなるらむ

うの花のにはふ垣根にはとぎす

首夏風

増野やす子

月前郭公

山川いく子

一聲高くなりけるかな

昨日けふ庭のわか葉を吹きわたる
かせ心地よき夏はきにけり

夕月のかけなつかしき木かくれに

一聲なのる時鳥かな

同 鎌田きく

納涼 篠原みやの

ほとゝぎすなきつる空は雲消えて

夕月のかけは田のもにうつろひて
たもと涼しき川風ぞふく

まきの板戸に月をさし入る

ころも 池袋すが

初夏山 館つね

たらちねの心つくしの新衣

八重櫻ちらにし山にうの花は

あやにしきよりたふとかりけり

今をさかりとさきこぼれけり

時鳥 工藤しけ

軒若竹

窪田八重

ねやの戸に一聲もらすほとゝきす

なれの夢にも秋やむすべる

しつかのきばの若竹の上に

郭公

松宮ゆた

無題

秋影

六十二

まつとしも今日はなけれどほとゝぎす

野にも山にも鳴き渡るかな

妻とらば琴ひくをとめ家買は、

銀杏ある家をのぞましと思ふ

夏草 森岡たけ子

野はなへてふみわけかたくなりにけり

すゝき高かやしけりあひつ、

楓尾董予

てりつゝき山田の水のみなつきに

露を含みてゑめるひる顔

納涼 東くめ

晝間の暑さの

炎そもそもたつ

くれなるそめなす

波間に落つるや

なごり見せて、
ゆふべの雲に、
いる日のかけ、
おきも暮れぬ、

熾けたる真砂路

* * * * *

夕風すゝしく

渡る磯を

いかなる折にか

ものすそかゝけて

友とのけば

よせくる白波

足をおそふ

若葉しけるなかに家あり世の中の

あつけさしらて誰かすむらん

* * * * *

納涼に來しかひ おりそ海の
 浪にもたわむれ 月にうたひ
 更け行く夜さへ 忘れはて、
 遊ぶもたのしや 夏のうみべ

歸省 小てふ

學ひの庭の こゝろみも
 果てなはいさや かへらなん
 我家の門の 松ひとき
 母の手かひの にはとりも
 思へはなつかし 我かふるごと

* * * *

妹もことしは 七ツなり
 みやけに買ひし この繪草紙
 姉様きりて それもちて

小をとりしつゝ よろこはん
 あゝたのしわれ いさやいなん
 思へはなつかし 我か故郷

* * * *

東風吹き入るゝ 窓のもと

妹と共に 姉様を

軒端の鈴を きゝながら
 母か好める 小説を
 よむもたのし、 きくもたのし
 思へはなつかし 我か故郷

* * * *

ほとゝきす 田島ます

たちばなかをる夕暮れ、 軒の玉水音たえて
 なかも淋しきわがやどに、 山鶲なるるなり

皇長孫殿下の御降誕を祝し奉りて

盛岡 菅原文一郎

我が大君と
皇長孫の
祝ひまつれよ
雲に舞ふまつれよ
君泛波う秋みゆ
萬べ静る津ぐ
歳るかほ島み
と龜なひ根の
もる四の露する
方をがれよ
にたれよ
* * * * *
仰ぐべき
御降誕
千代かけ
富士の巒
うああ身と
たじなまくに
ふたばれきう
なづらのけ
りもにる
* * * * *
我が大君と
皇長孫の
祝ひまつれよ
雲に舞ふまつれよ
君泛波う秋みゆ
萬べ静る津ぐ
歳るかほ島み
と龜なひ根の
もる四の露する
方をがれよ
にたれよ
* * * * *

君い海山枝
萬さわわ威
歳やかがの
を國聲ひ
民になかり
り

唱も振り仰
へるふへき
てとます見
てもまでまて
ん」にて

海水浴 濱 子

濱の松風音清きはとりに、海水浴するは夏の愉快
のひとつにこそあれ、我國にては十年あまり前よ
り此事行はれ來りつ。其有益なること、やうく
人の知る所となりて年を逐うて盛になりぬ。さて
海水浴の人體に有益なるは、海水中にくめる鹽
素、あるいはソヂユームの、皮膚をとほして人の體
内に入り、體熱の爲に化學的變化を起すによるな
り。又波動の作用、海濱の清空氣も相待ちて効を
奏するものなりとぞ。我國にて、はじめて行はれ

たる場所は、房州館山のほとりなるが、其後各地に行はれて、現に海水浴場として著名なるは、大磯江の島、逗子、鵠沼、興津、舞坂、須磨、明石、舞子などなり。これらはみな旅館など列ねて、たふとき人あるは外國人の集まる所ときけば、いかにはなやかに都にもおとらずさわがしからん、とぞおぼゆる、かゝらん所よりも、なほかたるなかの静なる海邊に浴したらんこそよからぬ、と思はるゝもかたくなる心からにや。

我故郷にて、皆人の海水浴するは、和歌浦と荒濱にて、いづれにも夏は我家にほど近き川より、日々浴客をのする舟のゆき、すれば、われらゆくにはいとたよりよし。ある年の夏歸省して、八月のはじめにもやありけん、一日荒濱にゆきたることありき。其日は空朗かに晴れわたりていとこゝち

よき日なりけるが、なにがしの君に誘はれて、そが母君と三人して行きぬ。舟は大橋とよぶ橋の下よりいでたり。時は正午にして、且つ乗合多かりければ、いと暑く苦しかりき。かの海に涼しく浴せんと思へばこそかゝる苦もすなれ、と母君の小聲にのたまふもをかし。いつしか舟は荒濱につきければ、下りて浴客休息所にしばし休む。小屋は丸木の柱によしの屋根なれども、いと廣らかにて中をいくつにも分ちたる、いとたよりよし。顔いと黒きおきなとおうな、茶など煮て客の用を待てり。後は一帯に松生ひ茂り颯々の音いとこゝちよく、前よりは潮風のたえず吹き來るいと涼し。殊にけふは濱の名にはたがひていとしづかなれば、浴客甚だ多く、二ヶ所に設けたる休息所いづれもみちくたり。さてしばしよりて三人とも輕やか

なる衣着て、うちつれて海水に浴す。たれもたれも、休息所にて借りたる麥藁帽子のいと大きなるをいただける、其さまいとをかし。おのれもその一人なりしを、いまさら思へばはづかし。向には淡路島ほのかに見え、左には雞賀崎の突き出でたるけしきいはんかたなし。潮風に吹かれつゝ水にたゞみ、浪の來るごとに立ち上りなどすることよき。筆につくすべくもあらず。深き所に水をちらして游泳するをのこあれば、いと淺き所に貞たづねるをとめ子あり、おのがじゝ浴せるさまいとたのしげなり。さてあまり永きもよからねば、とて、十五分ばかりにしてぐに上り、休息所に入り、衣をかわかしてもとの舟に歸りたり。川をさかのぼりて家に歸りたるは、六時ごろなりしやうにおぼゆ。

この濱かの浦今は山川百里をへだてたり。海水浴の好時期なるきのふけふ、いかに多くの人のかしをさして行くらん。この濱の松風はいまもなほ浴客の心をや洗ふらん。かの浦の潮風はいまもなほ浴客の面をや吹き拂ふらん。あゝ海水浴あゝ荒濱あゝ和歌浦。



女學生と浮華文學

人の心に、最強烈なる刺擊を與へるものゝ中で、一番に効力のあるは、感情が激發せる時に、

激動せる感情を謳つた文學を讀ませるに越したものは、恐らくあるまい。だから、若し其文學が、卑猥汚穢なる感情を發表せるものであると來た日には、之を讀む所の人の精神を汚濁することも亦、最も甚しいものである。

一體、戀といひ、愛と云ふもの、其本然の質に於ては、まことに純善純美なるものであらう。然し當今所謂文士と稱せらる人々の戀を謳つたものの、愛を說いたものが、果して其純善の本質を寫して居るであらうか、果して其純美の本質を書いて居るであらうか、如何にも表面だけは、やれ神聖であるの、やれ天地間の美であるのと驕ぎ立て、居ることだけは、分つて居る。然しながら其實は、一様に野卑醜陋淫逸浮華とでも云ふべき男女の痴態を演出してさうして表面だけは神聖とか

純美とかいふ名前を借り用ひて居る。此現象は近來の小説に於て最も甚しいと思ふ。
人生の時季の中で、一番感情の發動し易い、一年時季である、青年時代の男子にありては、一切前後の考とが分別とかもしないで、たゞ無暗に面白半分に冒險をやつて見る。所で、青春時季の女子にあつては、そら男子の様に無暗に冒險をやることは少ないが、併し其好奇心とか感情とか想像とかの熾盛なことは、同じことである。たゞ男子の様に、ザツバに外に顯すことのない丈夫れ丈寧ろ熾盛である。これ等の所謂未發の感情といふものは、人間品性の最大要素を形成して居るのであるから、若善良の方向に導かるゝ時は、無論、宜しのであるが、不幸にして不良の方向に養成せら

るゝ時は、其結果は誠に悲しむべきことになるのは明である。

所謂、當今の文士と稱する輩が、神聖純美など云ふ麗々しき看板の下に淫逸浮華なる男女間の痴態を演出せる歌詩小説——言すれば浮佻卑猥の

感情を表出したる文學は、此時代の精神に最入り易く、彼の未發の感情に最も強烈なる刺擊を與へるものである。燃ゆるが如き感情を巧に寫實せらる文學は、感情の熾盛なる精神には、頗る適合するものである。之に依りて未發の感情は益々熾盛となり、遂には趣味好尚を没却せられ、判断理性の力も失滅し、之等の文學が寫し出せる事實の中には、自分の身を置いて見、結局は、遂に其事實を實際に演出して見ようと云ふ氣になる。是に至ると、もはや其女性は精神的に死んで仕舞つたもの

である。不良文學が人を殺すことは、鋭い刃を以て斬殺するよりも甚しい。刃で殺された身は、未來に行つて靈性的に生活することも出來ようが、精神的に死んでしまつてはもう夫つきり未來永劫浮ひせがないのである。

汚濁野卑一讀嘔吐を催す様な文學が、現今頻々として出版せられる。かの吾人の同胞と云ふも耻づかしと賣女醜婦の寫眞を挿んでる小説の如きは、もとより論ずるまでもないが、其歓迎のされ様といつたらまことにひどい。又かの極めて優美な體裁で、便利な形體に出來てる所謂袖珍文學の中にも、或は若き血燃ゆると謳ひ、我が戀ふる君と叫び、戀の涙と恨み、優しの心と狂へる文字を以つて、全紙を埋めたものが、春の筈かなんかの様に、近來どこからもこゝからも、片々として

顯れる。ただ夫が幾らか詩的に出來て居て、然も體裁も優美に出來ている所から、一般的の女學生徒は争うて之を購ひ然も公然女學校あたりで、も閲讀して居る。これが教養の任に當れる人々も、之を咎むことをしない。演劇や寄席に遊ぶとは無論危險に違はないが、精神を毒する結果に至つては、演劇寄席と殆軒輊がないと思はれる。

今日の世の中、我國民は上から下に至るまで、擧つて高尚な趣味好尚を滅却し、舉世滔々として、殆んど混濁の衢に沈溺せんとしつゝあるのである。此時に當りて、國民の趣味を養ひ其好尚を高くし、以て將來國民の品格を純良ならしめるには、どうしても未來の母たる今日の女學生に待たんければならぬ。然るに今日の文學社會が、世間に向つて給供する所の文學は、右述べた如きも

(完)



ので一般の家庭は擧つて、之を歓迎し、多數の女學生は相卒るて、この不良文學の中に沈醉し、以つて其高潔玉の如く、純美花に似たる清淨の心情を汚濁し終りつゝある。國民道徳の消長は、古來何處の國で見ても、皆其國の婦人の狀態に依つて定まるのである。然して未來の母たるべき今の女學生の嗜好が、右述べた様な文學で養成せられつゝあるを思へば、我國將來の運命といふものは、まことに案じられるといはんければならぬ。

寄
書

書

遺傳病と結婚

秋影生

結核癆病等の傳染性のものと、寒胃性諸病、中毒、病、虛弱等の非傳染性のものとがある。乙は病的性状を體内に持て生れ、分娩後早晚發現するもので、痛風、血友病、神經病、ある皮肌病、癌腫等が之に屬する。此他畸形遺傳といふて、侏儒、巨

蛙の子は矢張り蛙で、鳶が鷹を産むだ例も聞か

ず。親に似ぬ子は鬼子とされ、如何でも血統はあらそはれぬものとしてある。實に父母の性状は、多くは其儘子孫に遺傳するもので、獨り生理的のそればかりでなく、病的のも同様である。今こゝに説かむとするは即ち後者の病的性状遺傳に就てである。

先づ之れを體質の遺傳と疾病の遺傳とに區別する、甲は即ちある疾患有する特異素因の遺傳で、

かくて疾病を子々孫々に傳へ或は新に加へて遂には其血族を絶やす様になる、殊に兩親が遺傳病を有てゐる時は猶更で、かの血族結婚の害はこれらとの關係もある、勿論この關係外に於て害毒の

で、その父母から直接に子女に傳はるものと、間を置いて子孫に至て現はるものと、支族に發するもの等に由て、直接遺傳、間接遺傳、文族遺傳を區別する。

原因はあるので、夙に諸家の研究する所となつて居る。

此の如く疾病は遺傳するものである、其遺傳病者との結婚は不健康の子孫を生み、永く悪疾を傳へ、獨り箇人一家の不幸ばかりでなく、實に國家生産力の消長に多大の影響を及ぼすものである、然らば則ち遺傳病者との結婚を避くるは、一は自己の幸福の爲め、一は國民としての義務ではあるまいか。

且つ夫れ、遺傳病所有者其人は、宜しく自ら結婚者の資格を放擲すべき義務がある、殊にある種の疾病者は斷然社會より退かねばならぬ場合があるとおもふ、例へばかの癲癇病者の如きは、平時は敢て健康者に異つた處も見えぬ故、自身は勿論、周圍も之を忽にして居るけれど、其發作の不意に

して危險なる、其病状の慘憺たる、往々不慮の災害を招くとがあつて、到底他の保護を受けずして生活し得べきでない、又其病の爲に身心衰弱して夭死するに至り、到底事業に堪うべきでない、彼は社會に於ける自己の地位を要求する權利を有たぬのである、止むを得ずむば法律を以てその社會的事業に從ふことを禁する必要があると思ふ、史に準ると此病者の中に、シーザー、マホメット、一世ナポレオン等の偉人が有たといふことであるが、それは異數中の異數で、且つ其病状の明ならぬと故、その事實が、わが論の反證として幾何の價值をも償ひ得るのである。

上段に一寸記した血族血婚に就ては、後日更に詳はしく述るがあらう。元來われは、結婚と健康との關係は、重大の問題として研究する價値が

あるとを信ずる、そして之を世人に普及するは刻々

下の急務であるとを疑はぬ、余はもと白面の一醫生であるが、之等の理由によりて、敢て自ら掲り出、數々かくの如き問題を提げて大方の示教を仰

ぐのである。

附記、活字の誤植と云ふ事は時として愛嬌を生むものであるが、時として只一字の誤から正反対の意味となり、前後の關係を支離ならしむるところがある、前號の拙文「健康と家庭」七十一頁二行目の「闘するも」は、はの誤、十二行「去れど」は「去れば」の誤である、前者は兎も角、後者は文意を損ふから敢て正して置く。

紀州新宮の七夕の歌

ト調 $\frac{4}{4}$ 3 3 3 2 7 6 7 1 | 3 4 3 2 3 | 4 4 6 4 |
 シチガツナヌカハノ — — タナバヘハ
 こ一こはくまのちのーーむかへは

3 4 3 1 7 | 6 7 6 4 3 | 6 6 7 1 |
 サ — マヨカ — ハチテマシよ
 う — どのは — しきかげ

4 4 3 3 4 6 | 3 4 6 3 4 6 ||
 コヒチメスヨトコヨキナヨ
 ふなばしなよとこよきなよ

七月七日はの

川をへだて、

たなばたさまよ

戀をめすよ。

こゝは熊野地の

むかへは鶴殿の

橋をかけましよ

舟橋をよ

子供の食事と家庭

長野 飯島八千溪

私の書齋は、ガラス戸で、前が四ヶ辻になつて居て、夫れから、向ひは、長家が幾軒か有つて、夫れには、車夫や、大工や、形付や、官吏や其他色々の仕事をする人が住つて居るが、其子供が、時々、此四辻に集つて、嫁取り(まゝ事)と云ふ事をする。夫れを、心して聞いて居ると、能く家庭の方面が知られて、甚だ寒心すべきものがある。そこで、何時でも、主人役を勤むるは、大概、年かさの、車夫の子で有る。夫れが、他の子供に、差圖して、今日は、お隣のおばさんが、お呼ばれに來るから、お前は、お米を四合買お出で、お前は、お味噌を一錢お鹽を五厘、お前は、ランプを持ッ

てお出で、石油を買つてお出で、お前は、今少し立つて、お呼ばれに來るのだから、夫れまで、向うの、井戸の蔭にかくれてお居でと、云はれたは、大工の子で、お前はと、指されたは、官吏の子で、役目はと云へば、お前は、お客様に、御馳走を、出したら、おねだりをするのだ（噫此一言何事ぞや）お前は、箱脊負（箱を脊負ひて、菓物、野菜、菓子等を賣る婆々の事）におなりと云はれたは、形付の子で、茲に、分署定まり、名々其役に就いた。間もなく、箱脊負が來た、婆々さん、今日は、お金がないから、お米を一合やるから、お菓子と、交換でお呉れ（其子の母の素行思ふべし）箱屋は、去る、買物役は、歸へり来る、お客様も来る、そこで、ねだり役の官吏の子が、敷へられた

通りねだる、そうすると、主人役の車夫の子が、コラ此あま何の事だ、お手をすえるぞ、茲へ手を持ッて來い、猶ほ、ねだると、外へ、掘み出して

眞似をする、猶ほ、ねだると、外へ、掘み出して仕舞ふ、お客様が、お謝する、家内總立にて、お客様が終ッた之れ子供業とは云ひながら、家庭の有様を、實際見る心地して、怖ろしく感ぜられた。

また此次に開始せられるか否かは、まだ分りません。

(一記者)

記者と讀者

ま、か、生

七月の天地



開旦、惠の露にうるほひて、うれしげに生き

くと森も林も野も山も、我より先きに静かに醒めて綠一入うるはし、稀に降る雨には勢殊に盛

なり。

●三河國石川りよしう氏へ御答申し上げます。仰之通り女子高等師範學校に嫁母練習科と申すのがあります。本年一月から開始せられたので、學力は

高等女學校或は師範學校女子部卒業の程度です。が、此には只今から入學することは出来ません。

着物をも脱がず元氣よく溪の清水に冷水浴を始むる頬白の親子あり、行儀よからぬやうなれど小鳥の遊びなれば

致方なし。降

る雨に濡れ燕は都遠き村外

の電信線上

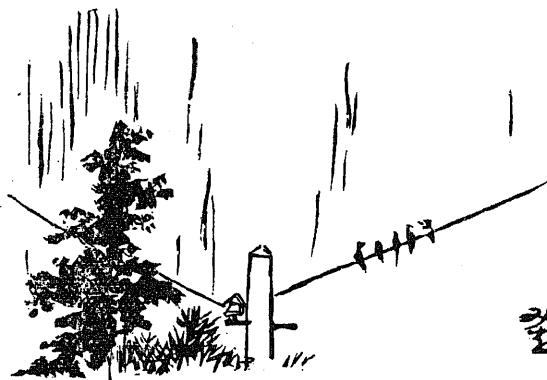
に親子兄弟姉妹の一家の團

樂む

で居る。

學生の休暇

は始まりぬ、なつかしき故郷に慕はしき父母同胞を見舞はむ爲に、嬉しき聲は都下の彼方此方にひ



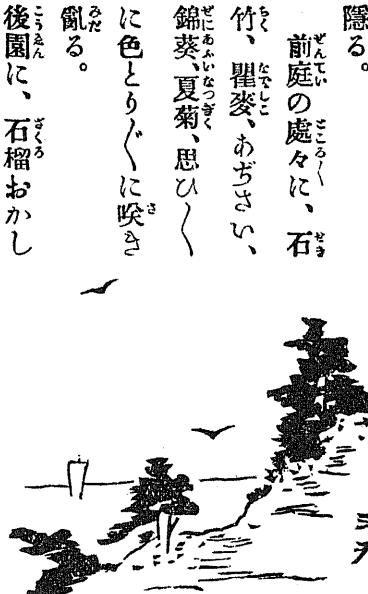
夕立は腕白童の涙の如し、降つてみたり、歎く。獨り反哺の孝ありと呼ばる、鳥のみは親しき親子の長の訣別の期に近きてをちこちの森に林にその鳴く聲やあはれなり。

夕立は腕白童の涙の如し、降つてみたり、歎んでみたり、その泣き出すや、英雄にも豪傑にも令嬢にもお三にも宮殿にも茅屋にも乞食にも石地藏にも、何の苦もなく頭から一氣呵成にあぶせかけ一過して腹をいやせば素知らぬ顔の晴天にかはるところ、最も愛嬌あるものなり。

蜘蛛の巣は涼しきものなり夏木立、食だに足らば網にすがりて懇むのみ、夕暮殊に面白し、獲物の外に妨ぐるものあらば彼奮然として前後に試むる柔軟體操の一節、前腕を平に動かせ、彼の得技とするところ尙此外に數多あり、蚊にさゝれ戸をさゝで見る夏の月は柄をさゝばよき團子なり、晝

の暑さは何の物かは。星の顔殊にきらりとなつ
かし。

二十日は土用の入なり、書籍、衣服、寶物等の
曝涼は此頃より始まる、紙魚慌て、謝罪して逃げ
隠る。



蒼き海、白帆。さては荒厳に激し碎けて巨濤
の咆ゆる、白泡の跳ねる磯。數知れぬ真砂の上に
さゝやく如く懶れて女浪のよする濱。賤の古屋の
鹽焼く煙礪馴松の間より颶る。

那智の大瀑布と華嚴の瀑布

伊香保、箱根、鉛山、熱海、有馬などの温泉、
逗子、鎌倉、大磯、興津、稻毛、などの海水浴、
富士、日光、榛名、妙義、高野の諸山。

バラード嬢の日本女子教育談

一記者

我がことに付いて、他人がどう考へて居るかと
いふことを知りたいと同じ様に、我が國に付いて
外國人がどう考へて居るかとは、吾々の日常知り
たくてならぬ所で。殊に吾が女學界のことや、吾
き、稻子叢に跳ねまはる。

後園に、石榴おかし
に色とりどりに咲き
亂る。
前庭の處々に、石
竹、瞿麥、あざさい、
錦葵、夏菊、思ひく
に赤き花を開き、柿の脊低き圓形の白き花見え
棗は高く橢圓の白き實を結ぶ。
清き流の溝端に、厄子香高く白き大形の花を開
き、稻子叢に跳ねまはる。

が婦人社會の風俗等に付きて、外國人は一體どう觀察して居るかとりわけ外國婦人の眼に、どう映して居るかは、吾々の最知りたい所で、併も之を知ることが最必要なことであらうと考へる。

そこで去る月の金曜日に或人の紹介で以て、パラルド嬢を牛込の寓居に訪問した。嬢は英國名門の系統で夙に彼の國高等の教育を受けられ、我が國に渡來されて以來既に八年、傳道に教育に孜々汲々として熱心に従事せられて居る、いつもながら、外國人の熱心には驚くの外はない。

一見した所、パラルド嬢は、所謂瀟洒にして端麗、併も其人と語るや無限の愛を満え、聞くに從つて洵々として述べられる、談は先づ宗教より進んだ。曰く

「日本人は、只今の處では極自由に動かうとして

居ます、宗教上の規則も何も構はないで自由な教會を立てたがつて居る様です。併し私の方では、此規則はどこまでも嚴重に守らんければならないのです。誰でも教師になれる、誰でも監督になれるといふ様では、いけません、お國の此傾向は、まことに殘念と思ひます。夫から一體申しますと外國の宣教師の中でも亞米利加人は英吉利人と比べては學問がありませず、又一體に身分も低いです。英人はまづ大抵はオックスフォードとかケンブリッヂとかの大學生卒業して夫から参ります。今まで日本でも亞米利加の人々が多く来て傳道しましたから、いけないと思ひます。」夫から話が一轉して教育のことと及んだ。余は嬢が過ぎし八年間我國に居られて女子教育に付きて觀察せられた所の如何を尋ねた。嬢は渙然一笑

曰く。

七十八

「女子教育ですか、ホー、随分大きな問題です。ねえ。然し私考へます、日本では眞個に教育といふことが行はれて居ましようか? 教育、英語の Educationといふ語の意義通りに行はれて居ま

しょうか? たゞ六かしい知識を教へ込むばかりが教育とは申されますまい。夫に歴史も教へます、地理も教へます算術も、物理も、化學も博物も教へます。併しエデュケーションと申すものは、眞實に人を仕立て上げる……人を慥りへて行くのでします。併し云ふ生徒……お嬢さんたちは大抵一人にして一年に千圓も二千圓も教育にかけます。

女子大學生ですか、ま一だめでしよう、私は大變殘念に思ひます、あんなに大勢入れて、夫で眞個の教育はとても、出来ますまい。

夫から、日本の婦人お嬢さんたちは、一體何の爲に教育を受けるかと申しますと、大抵は卒業して、いい所へお嫁に行く支度なのです。日本のおは學校生徒の一組の數が大抵四十人位二十五人位ですが……四十人位で、もそつと餘計にありまし

娘さんたちは、たゞいい所へお嫁に行くのが目的で、夫より他には何の目的もない、教育を受けて自分の身を修め、品格を高め様などの考を以てやる人は、一人も居ない様です。今少し日本の婦人も見解を廣く持たんければなりますまい。尤も英國あたりでは、元來、根本的に考が違つて居ます、女學校を卒業致しても、裁縫や料理などはどうせん勿論中等以上、私どもの仲間に在りましても自分で裁縫の出来る人はありません、料理の出来る人もないです、中等以下でも大抵下婢をおいてやらせます。料理や裁縫などは卒業してから、極々篤志な人がやるのです。

娘さんたちは、たゞいい所へお嫁に行くのが目的で、夫より他には何の目的もない、教育を受けて自分の身を修め、品格を高め様などの考を以てやる人は、一人も居ない様です。今少し日本の婦人も見解を廣く持たんければなりますまい。尤も英國あたりでは、元來、根本的に考が違つて居ます、女學校を卒業致しても、裁縫や料理などはどうせん勿論中等以上、私どもの仲間に在りましても自分で裁縫の出来る人はありません、料理の出来一體に日本では、餘り忙がし過ぎるじやありませんか、あれではとてもご自分がたの脩養だの勉強だのと申すことは出来ますまい、どうか先生方も今少しご自分方の脩養の爲に時間を得る様にあります。

夫から先生方、女學校の先生方にしましても、一體に日本では、餘り忙がし過ぎるじやありませんか、あれではとてもご自分がたの脩養だの勉強だのと申すことは出来ますまい、どうか先生方も今少しご自分方の脩養の爲に時間を得る様にあります。

女服の改良ですか？

まーこれも六かしい問題ですねー、併し私は日本の婦人が洋服を着ることはいけないと思ひます、何故かと申しますと、西洋の婦人の服は、一年年に變ります。昨年のは、もうことし着ることが出来ません。それですから大變に費用がかかります、勿論私は、いけないと思ひますが、どう

も致し方がありません、私の今着て居ますのも、
昨年の服ですから西洋人などには……お國の人には
は分りますまいが……見つともなとい思ひます。

お國の、まー、女官さんたちのお服でも、西洋

人から見るとお可笑です。夫は御殿の服を造る仕立屋さんは私共の服を仕立てません、私共西洋人のを仕立てる洋服屋は年々の流行を私共から教へますから宜しいですが、御殿のを造る仕立屋は誰も教へる人がないのですから知らないで妙なものを造つて居るんです。

夫から帽子なども要りますまい、何故かと仰る
んですねか……夫は日本では今迄冠らずに済んでき
ましたのですから、今から新に冠り始める必要が

ないでしよう、夫に花だの装飾だの随分高いんで
ありますし、又日本の婦人の髪の毛が隨分澤山あ

りまして甘く帽子がはまらませんのです。ですか
ら、洋服は、親御さんたちに氣の毒です、まー、
どの國にもない新らしい便利なのを考へ出すよ
り外ありますまい。

對話はこれで済んだのである、吾人は外國婦
人と語る時に常に感じられるのは、其見識が、如何にも高いのと、談話が頗多方面的に興味があるの
と、思想がチヤンと判然としてることなどである
が、パラルト嬢の談話に於ても殊にそう感じられた。余は嬢が多忙なる時間を以て特に余の爲めに
會談せられたる厚意に向つて深く多謝するのであ
る。

一聲は月が鳴いたかほとゝぎす

印度土人の家庭生活（承前）

Y. I.

夫で印度人の結婚のこと付て尙一二言申し上
て見ませう。ズット大昔に遡つて考へて見ますと
印度の制度は決して今日のやうに婦人をひどく壓
制する趣旨ではなかつたに相違はあらませぬ、當
時は宗教が印度の社會制度の基礎であつて、結婚
と家庭の神聖とは其制度中の高位をしめ、男女とも
に或る規定によつて、自分達の快樂のためと云
ふよりも、憲ろいろくの神様を悦ばしむるやう
に、暮さければならなかつたのでござります。そ
うですから小供の時に結婚させるやうなことは、
確かになかつたのです、又寡婦とても、今日のや
うに強て世の快樂を全く廢して、辛く苦しき生活を
することを要求せられなかつたのでござります。

印度の婦人は、一般に其良人を深く愛しますか
ら結婚して多年間、ともに樂しく暮しましたあと
で、寡婦となつて殘されるやうな場合には、宗教
上からして九つきり情慾を棄ることゝ、ひどく克
己することなどは甘じて受けます、なぜかと申し
ますと、自分達がこの世で凡ての快樂をして、
苦しい生活をするのは、その親愛する良人を未來
で幸福にしてやることになるので、又ゆくは
自分も共に其の幸福に預るのであると信ずるから
です。良人の死去するときに、未亡人が殉死する
のもつまり此迷信の增長したのでござります。な
ぜかと申しますに良人の屍を火葬にする爲めに
堆く積んである薪木の上で、その未亡人が焼死
するのは、その良人と自分とに直接に天の祝福が
あるばかりでなく、其先祖に約束された罪の赦し

と天國に入ることとを、四十二代ののちまでも許されるといふことなのでござります。

少しく年増の寡婦は大層敬はれますか、稚寡婦になりますと、實に印度の家庭に於ける一つの汚點となる位なのです、決して當人がひとり悲歎に沈むばかりでなく、兩親までもこの不運な娘のために、堪へられない憂慮に陥るのです。良人が死去了した後に其家に留まつて居ることは、一層堪へがたいことであらうといふので、實家に引とるやうに取計ふことも毎度あることで、この悲運を忍びやすくするために、種々様々と手をつくすのでございますが、宗教上の儀式になつてゐる階級的風習ばかりは、如何とも免れることは出来ないのです。

若ごく幼き時に寡婦となる場合には、他の普

通の女兒とあまりかはらない生活をさせますけれども、これが十四五歳になりますと、可愛相にまづ頭の髪をそつて仕舞いすべての粧飾も廢して極僅の質素な衣服を身に纏ふやうになるのですが、そればかりでなくどんな種類の小集にも出席することは出來ないので、自分の妹の婚禮であつても決して出席いたさないのでござります。夫でた家にばかり居て掃除のことだの、料理のことだの、何くれとなく立ち働くと、其他にたび々断食をして祈禱をするばかりです。

先かやうにして老先のながい餘命をすごさなければならぬのです、けれども爰に一つの家族的愛情の深厚なる一端とてもいふやうなものがあつてこの年わから寡婦は實家では自分の位置を失はないのでござります。若しこの寡婦が時経て齊家の

道に熟練いたしますならば（寡婦のためにはこの一事のはか此世の中に何の興味も持ないので）母親あるひは兩親が死去の後には、この寡婦がその兄弟の家の家政を司どる主婦となれるかも知ません、これは皆さまがさぞ不審に思召すでしやうこの寡婦の兄なり弟なりは、ぜひとも妻を娶らなければならぬのに、どうして左様なことができるかと、おうたがひになるに相違ありませぬ、併しち寡婦の方が其妻君よりも年長であるとか、殊にその家の相続人が寡婦の弟である場合には、その姉なる寡婦は嫁の上位に立つて家政を執る権利があるのです。

只今私の心に浮ぶのは、印度で有力な一人の紳士であつて又有名な改革家であります、此人の細君は教育もあり、又英語なども巧に話せる方であります。あつて印度の社會生活の改革について、良人が企つることに深い同情をもつて、熱心に奮勵して良人を助けて居られます、この夫人は家政を治めないで、良人の姉にあたる一人の寡婦が代つて家政をいたされますが、この寡婦と申すのは至て舊守で、從來の宗教を堅く信じて居られます方で、大變に不運な人であるといふので、皆がたいそう親切に待遇し、その意のまゝに任せてあります。過し多年間印度の改革者の第一の目的となつて居るのは、このいとけなき寡婦の生活を、ひどく苦しめる所のいろ／＼なわるい風習を改良するといふことでしたが、今までの所では從來の宗教を固く信仰して居る家族では進歩だの改革だのいふことは、到底行はれないのです。印度の宗教と僧侶とは、このやうな改革にはどこまでも反対いた

しますから従つて婦人達も、そういうふ不敬な異端の建議には、飽までも抵抗するのでござります。

女監を觀る

澤

生

去る或年の春、公の手續を経て、熱誠なる某典獄が某縣師範學校女生徒に女監の參觀を計されし時の心覺えなり。

午後一時うちつれられて發す、程なく黒塗の大門を越え門衛に會釋して入る、受付の案内にて直ちに樓上の應接所に伴はる、某々の兩看守長上り來りて接待せらる、暫くありて、曲獄はいと質素なる略服にて出て來り一應の挨拶終りて、穩に一同に對して、

ところに從へば女子の犯罪者は男子の犯罪者の數の約十分の一なるに、我縣下には此平均數より女子の犯罪者の多きを見る、余は消極的の社會改良者として積極的の社會改良者たる諸淑の盡力を望むとの意味の演説せられ、今日は女監及び幼年監並に炊事場に就きて十分參觀せられたし、自分は據なき公務の爲に案内し難きにより兩看守長に依託し置きたれば何なりとも不分明のところは兩氏に尋ねられたしといと懇に言ひのこして退かれぬ。

一行は乃ち兩看守長に伴はれて、いよ／＼監房内の參觀に赴きぬ、恐しげなる第二の黒門は異様

なる音しつゝ開かれて、我等は入る、一種の淒みある空氣は我面にふれわたりぬ、男監と女監との並びの柵は高く聳えて狹からぬ通路をも小溝の中

を行く思ひしながら「女監」と記せる第三の黒門に至る開かれむことを合圖するにや看守長は門に置せる札付の紐を引く、門は忽ち内側に開かれて其處に立てる袴着けたる四十近き一人の女の看守丁寧に默禮しぬ、此處を踏み入ればまた第四の門あり、この門より内は平素は殆んど男子の出入することなしといふ、門は漸次に小さくなりて境域はます／＼せばまる、闕をこのれば此處を早や此世の地獄なるいとも／＼ものすこくすぎましき處なりける。

房内の囚徒等は今は工場に出役中なれば、われは看守長の示さるゝがまゝにうからふに、各房は一間に二間の板間にして奥の一隅は便用の所なり房の中央にしまりよく疊みたる薄蒲團二枚の上に枕を置き、二つの小桶と雑巾とを其積み重ねの前

の板間に並べ置けり、整頓の正しきと板間の清潔なるとは共に我には意外の感ありき、されど此感は房の前後に於ける幅三尺の鐵窓と戸口にかかる錠とのいかめしさにうち消されたるのみならず、囚徒の罪名及び住所、族籍、生年月、番號を記せる戸側の標札には呆氣にとられて言葉も出でざりき、曰く謀殺、曰く竊盜十四犯、曰く強盜幾犯、曰く放火犯、曰く謀殺、曰く故殺、曰く強盜殺人犯と、私は幾度となく「如何にもと」疑ひて其姓名を検せしに確かに皆女性に相違なかりき。

重罪犯の房に次ぎて輕罪犯の房あり、竊盜犯のもの多し、監房の構造は罪の輕重によりて差別なく何れも一房毎に三四名宛囚れ置かるゝものと標札の數によりて推察す。

十數の監房を過ぎて囚徒等が毎日暮工場に出入

する時の身體の検査所に至る、狹き廊下の中ほどに板間より三尺餘の高さに横へたる二本の門あり、彼囚徒等は毎朝必ず衣を脱して此方に吊し置き、身に一片の被なくして此二本の門を跨ぎ越して彼方にて更に他の工場着用の赤衣を着して終日工場にて働き、夕に監房に歸るや又しかなすとかや、斯く朝夕の検査をなすには謂はれあることなるべし。世の常の人のならば聞くだにいまはしくはづかしきものならむを彼等はそもそも感ぜざるか。

行く～彼等の働き居る工場に入らむとす、女の看守「禮」の令をかく、彼等は等しく手ををさめてうつむきぬ。終りて復業にかかりぬ。われは當時既に異様の感慨にうたれつゝありしかども、なほ徐ろに彼等を觀察しぬ、場の西の方には機によ

りて布織れる者十數人、東の一方にて足袋縫をなし居るもの二十人ばかり、其南の方には紹緯、絲つなぎ等くさぐさの業を執れるもの十人あまりあり老も若きも強きも弱きも共にそれ／＼定められたる課業を爲し終へざらむとを只管恐るゝものゝ如く聲咳するものもなくいと忙はし。而して特に我が神經を刺戟せしものは、其突き上げたる若くは押付けたるが如き鼻、臂敷の蒲團の如く厚き、一厘煎餅の如く薄き唇、備前焼の花瓶の提梁の如く、橙の樹に生えたる木耳の如き耳、其耳の邊まで裂けたらむばかりの口のあるは開放したる、あるは恐しく縊りたる等、總じて特別製の道具を以てよそはれたる薺翦塊の如く、佛掌薯の如き、梅干の如き熟柿の如きさては四角六角三角八角などの雜多異様の面貌に、かてゝ加へて實無しの栗

の長き毬彙の如き蓬生の如き焰の如きくさぐの

頭髪はいとど悽愴を添へて何れも不平とも悲哀と

も遺憾とも辨別し難き臘^{おぼる}なる其眼をば其熊手の

如き鐵火箸の如き業操れる手もとに注ぎ居たる彼

等の相貌なりき。われは唯黙し居るのみなりき。

工場の東の壁に西面せる佛壇あり、内に阿彌陀如

來の一軸をかけたり、例の看守長恭しく開戸を排

して囚徒の面前に於ておごそかに一禮す、われも

場所柄のことなれば輕からず黙禮す、聞けば彼囚

徒等は此如來の前に於て時々教誨師の教を受けし

めらると、思ふに餓鬼の如き彼等は幾度か人間に

生れ變りて遂に能く菩薩の域に立ち至るを得べき

(未完)



時 言

時 言 子

夏は來れり。

酷然燃ゆるが如く炎暑焼くが如しなど云へば、

夏といふもの、如何にも一年中の惡まれ者の様な

り。脇加答兒・赤痢・虎刺拉等、最怖るべき傳

染病の流行季などいへば、夏といふもの、さながら

ら一年中の罪人にも似たるか。

併れども、凜烈膚を刺せし潮風は、今は極樂の

餘り風となりて絶えず汚熱を拂ひて清涼を傳へ來

るあるに、まして綠樹の陰清流の邊の遊快は、如

何の時季に於て見るを得べき。吾は四季中最夏

を愛す。况んや恐るべき傳染病の流行は、反つて

吾人の不衛生を誠むる夏の訓誡の賜なり。誰か一

年中最愛すべく、最恩深き夏を稱して惡れ者の

如く罪人の如しといふか。

夏の愛すべきは、たゞ之のみにあらず。一家舉つて海の邊山の蔭に居を遷し、暫し世を忘れてこゝに自然を友とす。子女教養の好機會此の如きもの四季中又何れにか求むるを得ん。千丈萬丈の紅塵を浴びつゝ日夕營々として書物と首引なせし學生も、殺風景極まる下宿寄宿の住居を脱して、こゝに再び麗はしき郷里の山水に接し、涌くが如き同情の家庭に歸省す。夏あればこそ。

夏ながらんか、吾人の脳は大方は都の塵にまみれて自然を忘るゝなるべく、殺風景の交際に慣れたる吾人の心情は、遂に家庭に於ける眞個掬すべき同情に温めらるゝ期を失なふに至らん。

勞れたる體力を恢復し、倦める脳髄を新にし、冷えたる同情を温むることを得る、まことに夏の

賜なるかな。今やこの愛すべき夏は、來れり。郷里の父母兄姉は更に時ならぬ春を迎へし心地にて、愛すべき子女弟妹を待てり。山も待てり水も待てり。手植えし桐も、手飼ひし犬も、嗚呼凡てが待てり。

希くは山紫水明の域に逍遙し、満室の同情に浴し、かくて秋高く氣清くなる時に於て、健全なる身體と新鮮なる精神とを以て再學窓の下に諸君と相見えんかな。

師弟の道

古の士、學をなすや單に身を修め心を正しくするに在りき。今の人學をなすや多く資格を得糊口の資に供せんがためなり。古の士は、師の人となりを敬慕し其品性の感化薰陶を受けんがために、

入つて弟子の禮を取れりき、今のは、先づ學校を卒へて而して後得らるべき資格を的にして、校門に入る教師の學識品性問ふ所にあらざるなり。古の師も弟子に臨ひや、身を以て之を卒む親權を以て之に接す。富貴に阿らず、權門に媚びず、卓然として一世に超絶して、自家の所信を行ひ一代の尊信悉く一身に集まるなり。此の如くして、師と弟と相待つて所謂師道大に振へりき。今の教員に至りては吾遂に之をいふに忍びず、只言ひ得る所此の如きのみ、一官吏として其職を行ふ、故に浮沈常なき官海の風波に身を委す、是を以つて職去つて身究す、即師道を行ふを力むるよりは主として官海游泳の術を行はざるべからず。師と弟と相携へて此處に師道頽敗す。

今の人口を開けば、即師道の興らざる弟子の禮

衰ふるを歎ず、是に於て修身に、唱歌に、日々營々として其恢復を圖る、併も其依つて來る所を考ふれば、一篇の歌一場の談の遂に能く修養し得る所にあらざるものたるを知らん。

宗教界の活動

炎熱の夏來りたりとて、何所も彼所も昏々として隋眠を貪れる時に當りて、獨り目覺ましき活動を顯せるは宗教界なり。基督教は先月中大舉傳道と稱して、市内の教會連合して殆んど連夜の大説教を試み、成績すこぶる見るべきものあり、是に於て東亞佛教會は、更に錦輝館に於て、大に演説會を開いて、耶蘇教、天理教等の反對運動に着手せり。右に付きて例の千崎如幻氏、語りて曰

「どうも基督教徒の熱心には驚きます、あの熱心で以てやれば、成效が見られずには居れません、佛教徒などとても叶ひません、東亞佛教會など駄目です、まるで他がやるから此方もやるといふ風なので、あんな演説會や托鉢などよりも、もそつと外になすべき必要の事業が、いくらもあるではありますか。此間も私は教會へ行つて聞きましたが、彼等の熱心な説教には私などでもありがたくなつて來て、ざんげしたくなつてきましたからなー。云々。

今や德風地を拂ひ、道心日に幽なる時に際し、基督教の壯舉まさに機を得たるものといふべし。

時論抄錄

抄錄子

吾等の見界を擴くし、吾等をして下等の快樂を去りて高尚の趣味を興ふる眞の良友なれば、獨り女學生といはず既に家庭を作れる主婦に取りても常に讀書の習慣を養はざるべからず。西洋の婦人就中英國の婦人は最讀書を好み。其原因是大略下の三に歸すべし。(一)幼時よりの習慣、(二)交際上の必要。(三)廣大普遍の趣味之なり。(をんな第五號 井哲子)

●舅姑に告ぐ 女子教育の進歩發達を期すると共に此新教育を受けし女子を容るべき舊家庭を改良せざるべからず、然らずば今日過渡の時代には幾多不遇の女子を作り、或は一家の困難もこれより生ずる事あらん、世事に經驗ある舅姑は何つけ、粗忽もあるまじきが時々は時世に會はぬ考もあるべし、舅姑は常に昔と今は萬事相違せりと覺

悟すべし、世事に實驗ある母と新教育を受けて文
明の智識を有する嫁を相談相手にして一家の事を
慮らば家道益々繁盛し一家和合すべし。(裏錦第百
四號)

●一家の經濟に於ける主婦の覺悟 我國の現況
を見るに都會の人士財力をかへり見ず、奢侈を極
め流行を逐ふ、此風習漸次山村僻地にまで及ぶ、
今や經濟界不振の悲境に陥り。銀行の解散、會社
の破産瀕々として相繼々に到る、こは獨り一國の
上ののみにあらず、小にしては一家、一人の上に及
ぶものなり、其の原因は世の流行を逐ひ奢侈を競
ふによるなり、故に一家の經濟を主とする主婦は確
固たる精神を以て此の風潮に反抗し堅く勤儉を守
らざるべからず(家庭 第六號)

●社會改良と婦人の勢力 日本婦人の勢力振は

ずとは、一般的の定論なれど、實際其潛勢力偉大なる物故、社會の改良は婦人によりて行はるべきなり、其第一着歩として、宴席集會などにはいまはしき下等女子の跡を絶たしめ、夫人令嬢を伴ひて出づる事にせば、吾も人も高尚なる快樂を得るに到らん、家に在つても外にありても、樂を共にして、父子夫妻秘密なく隔意なく、常に和氣藹々たる家庭を作るに到るべし。

●禮法

禮法の形式よりも精神の重んずべきはもとよりなれど、規則的の形式は自然精神をも規則的ならしめ、粗暴なる舉動は、常に粗暴なる心に伴ふものなる事を考ふれば形式とても狠に輕んずべからず。(上以二件婦女新聞 第五拾六、七號)

●日本人の體育に就て 婦人の幅廣き帶は、内
臓を壓迫して害あり、又衣服の肺臟の發育を害し、

上肢の運動を妨ぐ故に胸部の仕立方を改良せざるべからず、コハゼがけにするもよし、小兒は附紐を下に着くべし、袴を着しても、其下普通の服にては下肢の運動自由ならず、こも亦工夫を要すべからものなり、また米を常食とせる日本人は含炭物多きに過ぎ、含窒物、不足勝なれば米よりも麥を食する方宜し、若し米を食するとしても、なるべく其分量を少くして、含窒物の不足は魚獸の肉にて補ふべし。(日本婦人 第十九號 高木兼寛君)

● 慈善につきて 真正の慈善たるや否やを極めずして輕々しく應ずるは却りて不慈善となるやも計られず、深く思はざる可からず、又つとめて己が慈善事業に從事することを世人に披露せんとする偽善は言語同斷の舉動なり(女鑑 第二百三十號)

上肢の運動を妨ぐ故に胸部の仕立方を改良せざるべからず、コハゼがけにするもよし、小兒は附紐を下に着くべし、袴を着しても、其下普通の服にては下肢の運動自由ならず、こも亦工夫を要すべからものなり、また米を常食とせる日本人は含炭物多きに過ぎ、含窒物、不足勝なれば米よりも麥を食する方宜し、若し米を食するとしても、なるべく其分量を少くして、含窒物の不足は魚獸の肉にて補ふべし。(日本婦人 第十九號 高木兼寛君)

● 慈善につきて 真正の慈善たるや否やを極めずして輕々しく應ずるは却りて不慈善となるやも計られず、深く思はざる可からず、又つとめて己が慈善事業に從事することを世人に披露せんとする偽善は言語同斷の舉動なり(女鑑 第二百三十號)

● 女子高等師範學校附屬高等女學校生徒演習會。先月二十六日水曜日午後一時より同校體操場に於て開會、說話、音樂、席上揮畫・作文、朗讀、英語對話等の演習ありたりとのことなり。

● 各學校暑中休暇 女子高等師範學校は愈來る十一日より、本校附屬校園とも暑中休暇に至るべく▲女子大學校は本月一日より授業半日とし同十一日より休暇となるべく▲東京府第一高等女學校は先月二十日より既に半日授業となせしが、來る二十日より夫々休暇となるべしとなり。



羣報

東京府教育會附屬幼稚園保母傳習所開會以來

● 東京府教育會附屬幼稚園保母傳習所。開會以來

一禮式演習

○ 行幸を拜する路頭禮

石井泰次郎
町田さん子

頗盛況を呈し目下生徒數殆八十人に達したる

が、愈々本月十五日より試験を開始すべしとい

ふ。

● 坪井博士のアイヌ風俗幻燈會 先月女子高等師

範學校生徒の土曜會に於ては同博士を招待してア

イヌ人の風俗幻燈會を催せしが、同博士は北海道

に於て自ら親しく實地調査せる所に依りて最詳

密なる説明を與へられたりとのことなり。

● 故松岡明義氏十年祭 先月廿二日日本橋俱樂部

に於て、左の順序に依りて執行せられたり。

式之次第

一時物 十二合 外居紙立梅重松重
酒 二瓶 口裏蝶花形

大谷秀實

● 大日本婦人教育會 先月十五日土曜日午後一時

○ 料紙硯差上様
○ 響應禮庖丁式(蓬萊の鰐)
○ 花結貝桶の緒結方近古近世

中村兼太郎
柳原靜太郎
小山莊太郎
松岡志計子
同門人中
中村菊太郎

○ 二汁七菜給仕方
○ 婚儀式立禮
○ 庖丁式(早之經)

中村菊太郎
柳原靜太郎
小山莊太郎
松岡志計子
同門人中
中村菊太郎

因に記す、松岡明義氏は、近來有數の故實學者にして、十年前逝去せられたるが、禮式は伊勢流の奥義を極められたる人、今日の禮節家にして氏の門を出たる者少なからず、たゞ氏の形式を傳ふるのみにして、其深奥の學理を傳ふる人なきは惜ひべしと或人は語られたり。

華族女學校に於て開會 中村教授の幼兒保育に關する演說あり 頗盛會なりしと云ふ。

●本會例會先月一日附屬幼稚園に於て開かれたるが頗る盛會にして席上中村教授の演說あり、要は、現今幼稚園は形のみフレーベルの式に做ひて其精神は全くフレーベルに反せり、保育に從事する人々もフレーベルの如き熱誠を以つてせらるゝものなし、幼稚園の効果上一層のことに當然のことなりと云ふに在り。尙先々月大阪に於て開かれたる保育會の狀況を咄され、終りに秋山七郎氏の演說あり、本號に登載すべき之所都合によりて次號に回せり。

●講習會一束 ▲女子夏季講習會 東京府教育會は来る八月一日より、同月二十一日まで神田橋外東京府第一高等女學校内に於て夏季(女子)講習會を開く講習科目及び講師は左の如

(教育)女子高等師範學校教授 安井てつ子 (國語) 東京府女子師範學校教諭 前田捨松 (音樂) 東京音樂學校教授 小山作之助 (裁縫教授法) 女子高等師範學校舍監 喜多見佐喜 (禮式) 華族女學校講師 小笠原清務 ▲帝國教育會夏季講習會 師範學校中學校高等女學校の教員及び該教員志望者其他左の學科研究志願者の爲め本年八月一日より同月二十七日まで神田一ツ橋通の該會に於て夏季講習會を開設する筈なり志望の人は其の講習すべき學科及び氏名住所職務を記したる書面を以て至急申込むべしと其講習學科及講師は左の如し。

(教育學) 高等師範學校及實學館講師 熊谷五郎 (國語) 東京帝國大學文科大學及女子高等師範學校講師 関田正美 (教育行政) 東京帝國大學法科大學講師 法學博士 木場貞長 (心理學) 東京帝國大學農科大學講師 塚原政次 (動物學) 東京帝國大學農科大學教授 理學博士 石川千代松 尚講習の餘科として一回又は數回澤柳政太郎湯本武比古藏原惟郭文學博士松本亦太郎諸氏の講演ある筈なり。▲育成會夏季講習會 日本法律學會内に於て八月十一日より同月廿四日まで開會す。講習學科及講師は左の如し。
(倫理) 大學院在學文學士 深作安文君 (法制) 東京控訴院判事慶應義塾大學部講師日本法律學校講師法學士 浅見倫太郎君 (經濟) 東京府參事官東京府專修學校講師法學士 松浦鎮次郎君 (教授法) 高等師範學校訓導 佐々木吉三郎君

● 教員検定規程中改正の要領　今般文部省令第十

二號を以て、明治三十三年文部省令第十號教員検定に關する規定中に、多少の改正を加へたるが、検定を爲すべき學科目は左の二十二科目と定めらる、

| | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|-------|---|
| 修 | 身 | 教 | 育 | 國語及漢文 | 英 | 語 |
| 佛 | 語 | 獨 | 語 | 歷史 | 地 | 理 |
| 數 | 學 | 物理及化學 | 博 | 物 | 法制及經濟 | |
| 習 | 字 | 圖 | 讀 | 家事及裁縫 | 體操 | |
| 音 | 樂 | 簿 | 記 | 農業 | 商業 | 業 |
| 手 | 工 | | 藝 | | | |

歴史は日本史・東洋史・西洋史の三部に數學は算術代數幾何、三角法、解析幾何、微分積分の四部に物理及化學は物理、化學の二部に博物は動物及生理、植物、礦物の三部に圖畫は毛筆圖畫用器畫、鉛筆圖畫の二部に家事及裁縫は家事、裁縫の二部に分ちて検定を出願するを得此場合に於て一科目的一部若は數部の検定をなするも手數料に關しては一學科目と看做す三角法は算術代數幾何に解析幾何は三角法に微分積分は解析幾何に合格したる上にあらざれば検定を行はず

又左の五項に該當する者は無試験検定を受くるこ

とを得

一 文部大臣の指定したる學校卒業者及選科修了者

二 師範學校、中學校、高等女學校の卒業證書を有し更に卒業生の教員免許資格に關し文部大臣の許可を受けたる公立、私立學校に入り三年以上在學して卒業したる者但し修業年限五年の高等女學校卒業證書を有する者の在學すべき年數は二

學年以上とす

三 師範學校、中學校、高等女學校、及之と同等以上の學校の卒業證書を有し更に外國の大學校若は之に準すべき學校に於て修學し學位若は卒業證書を受領したる者

四 外國に於て師範學校、中學校、高等女學校に準すべき學校を卒業し更に大學校若は之に準すべき學校に入り修學し學位若は卒業證書を受領したる者

五 教員たらむと欲する學校の學科程度と同等以上の學校の教員免許狀を有する者

● 不具者教育に關する調査　市教育會調査部に於て査定したる不具者教育に關する問題は、先般其の調査主任より報告したるが、不日評議員會を開き協定する筈なりと云ふ。

(一) 盲人學校、

(二) 嘎人學校

圓五人分)

九十六

二 本市に速に盲人學校暨人學校各一個を設立するの計畫をすべし

二 雜給金二百八十圓 小使及臨時雇上人足給料等
三 諸資金六百圓 備品消耗品費等

(東京日々新聞)

痴人學校は既設の痴人學校を補助し其方法成績等を調査し更に方案を立つるものとす

三 盲人學校を設立するに就ての要件は大畧左の如し

(一) 學科は高等小學の學科と同じく外に鍼灸學の二科を設立するものとす

(二) 生徒定員を一百名とし其年齢は十歳以上十五歳迄とす

(三) 學校の敷地は大略五百坪を要す

(四) 學校の位置は赤阪、麻布、芝の方面を可とす

(五) 校舎の建坪は大略一百八十坪を要す

但平家建とす

一 普通教室五十坪

二 特別教室三十坪

三 寄宿舍々監室賄所等一百坪

(六) 教員七人(内一人校長兼任)を要す

一 普通教員五人

二 琴教員一人

(七) 一ヶ年の經費は大略金三千百八十八圓を要す

一 教員給金二千四百圓(校長月俸五十圓教員月俸平均廿五

●●●●●●●
○剝製鴨の御下賜 天皇陛下が文武の道に御志深くわたらせ給ふ事は、かねてもれ承れる處なるが、昨年四月佐々木侍従武官を韓國に差遣せられたる砌、林駐韓公使より、同國產茶褐色の大鴨獻上の儀を願出たれば、同武官は之れを携へ歸りたれど、韓國にても、我國にても、未だ其鳥名分明せざりしかば、直に之れを博物館に廻はし、更に帝國大學に調査を托したるに、漸く「アカツクシ鴨」と稱し、本邦西部には生存する事あるも、甚だ稀有なる事を報じ來りしと、同時に動物學の参考上其寫眞にても責めては永く大學に保存し置きたしと趣を、同大學總長より申請する處ありしも、

只一羽のみなれば、撮影もならずして其儘と爲り居りしに、本年四月に至り、再び井上侍従武官は

韓國差遣の命を拜したるより、不圖「アカツクシ

鴨」の事を思ひ出し、駐韓公使林權助氏に會し、

昨年獻上の鴨は誠に稀有の動物にして、其の名を

「アカツクシ鴨」と稱する旨迄も語り出でたるに、

林公使は大に喜びて更に自ら三羽を狩獵し得て、

直に剥製とし、同武官に迄獻上取計方を依頼した

り、去れば同武官は之れを携へ歸り、此程御手元

に獻上し、縷々來歴を奏上したるに、畏くも陞

下には、直に大學の希望を容れさせられ、其内の

一羽を大學に賜はり、永く動物學教室に留め置く

べき旨の御詫ありたれば、宮内省內事課よりは、

去る六日大學へ懇くと恩命の程を傳達したるに、

同大學の感喜一方ならず、早速山川總長自ら宮内

省に出頭し、該剝製鴨を拜受したりといふ。

(東京日々新聞)

●マクス、ミュラー文庫の購入 故大英國樞密

顧問官牛津大學言語學教授「ドクトル」フリードリヒ、マクス、ミュラー氏所有の文庫の、言語

宗教、哲學、神話、歴史等に關する古今の圖書を

包含し、内容の豊富なる、選擇の宜しき其學術攻

究に、一大利益を與ふるものたることは、同氏の

遺言、及専門家の證言に依りて明白なり。然るに

博士歿後、同夫人は、之を一括して學者の閱覽に

供せんため、希望者に賣却せんと欲し、先づ之を

博士の舊弟子たる、我東京帝國大學文科大學教授

文學博士高楠順次郎氏に通じ、殊に其圖書の全部

を日本に譲與せんことを切望し、同大學に於ても、

之を購求せんと欲し、種々計畫する所ありしが、

終に経費の許さる爲め、之を購入すること能はざりし所、時の外務大臣加藤高明氏の紹介、及末松男爵の斡旋に因り、男爵岩崎久彌氏、之を購入して東京帝國大學に寄贈し、以て學術研究の用に供せらるゝこと、なれり、唯に岩崎家の美譽として賞揚すべきのみならず、實に我帝國學術の研究上、一大利益を得たりと謂ふべきなり。

●大阪市に於ける京阪神三市聯合保育會　由來幼稚園教育に於ては、東京地方は遂に關西に及ぼす彼地の盛況は、毎年春秋に於ける聯合會の盛會に因りて知るべし。左に大阪市保育會提出の唱歌を擧げん。

兵士の看護婦（消煙見る／＼の譜を用ひて）

(1) 頭に帽子、腰に「サーベル」胸にはひかつた勳章がけてむかふを通る兵隊さんは戦にかつた、ふらい人の子供は大きくなつて、みんな、あのやうにあらくなれ。

(2) 白い帽子、白い洋服、袖には赤い十の字つけて勳章かけた赤十字社の看護婦さんに、兵隊さんの病氣やけがを深切によくせわしたる人。

遊び事（體が靈ひの譜を用ひて）

(1) 「ボート」を漕ぎませう。櫂をば握り力を入れてしつかり漕いで相手の舟に後れずにまげず。

(2) 馬事しませう手綱をもつて山でも坂でも、とつと走り汽車にしまげずに飛びかけてゆく。

(3) 兵隊事しませう、鐵肩によるさと進みむかふの敵を一度にねらつてづとんと打てやれ、

(4) 掃除をしませう奇麗にしませうはたきで拂ひ幕ではいて。敷居や柱や板の間をふきませう。

(5) 洗濯しませう。盥に水をくみ、よごれた手拭をして、さぶさぶさふくしたら奇麗になる。

(説明) 本會提出遊戯の子供遊び及び兵士と看護婦の二種は幼児の常に好んでする遊びの中より心身發育上の助けとなるものと選びて順序と調子とを付し尙一層の興味を添へん考案にして其の遊び事の種類は男女自ら好む趣を異にするものなれば男兒の爲にするものと女児の爲にするものとな合した。

島根縣松江市女子教育の概觀（承前）

彙

第一條 本會は女學會と稱し松江市内に設置す

第二條 本會に主として現今尋常小學校卒業或は半途退學者にして裁縫其他の學科を補習せんとするものゝ爲に設く

第三條 本會は修身家事裁縫を主とし併せて普通の讀書作文習字の四科を課す

但し時宜に依り茶の湯挿花等を増科することあるべし
第四條 本會は晝間は主として裁縫を課し他の學科は夜間の教授とす

但し夏期は此限にあらず

第五條 本會の生徒を別ちて左の三種とす

甲は修身家事裁縫讀書作文算術習字（晝夜）

乙は修身裁縫讀書作文算術習字（晝間）（夜間）

丙は修身裁縫習字（夜間）

第六條 休業日は左の如し

一日曜日 一祝祭日 一冬期休業十二月廿五日より一月十一日まで 一夏期休業七月二十二日より八月三十日まで

第七條 本會に左の役員を置く

會長一名 監督一名 舍監一名 常置教員一名 講師若干名 書記二名

一會長は一切の事を統理す

一監督は入退者及び教務並に舍内に關する事を掌る
一舍監は舍内取扱の事を掌る

一常置教員は主として裁縫教授を掌る

一講師は一切の教授を掌る

一書記は會計及び庶務を掌る

第八條 本會は寄宿舎を設け本會生の外品行方正なる篤志者に限り入舎を許す

第九條 本會に入會又は入舎せんとするはもの履歴書に二名（一名松江在住）の保證人連署願出づるものとす

第十條 本會に入會或は入舎するものは金費束脩及び月謝左の種類に従ひ束脩は入會の當時月謝は其月五日（退會なざら限りは出席）までに納むるものとす

但し時宜により幾分を免除することもあるべし
舍費一ヶ月金參拾五錢 入舎生に限る

甲 束脩 金參拾五錢 月謝 金貳拾五錢
乙 同 金貳拾五錢 同 金拾五錢
丙 同 金拾五錢 同 金拾五錢

子守等の爲めに特別教授をなす

但し束脩月謝を要せず
(未完)

海外彙報

シユブルン夫人

等にして、修業年限は二ヶ年なり

●亞米利加合衆國シカゴ府フレベル會保姫練習學
校 同校は千八百七十六年の創立にかかるもの
なるが、目下其職員は左の如くなり

校長 ブラッチフーラルド夫人。

副校長 ペーネ夫人

教育學及保育學理論教授 アリス、ブトナム夫人

恩物及作業教授 メリー、ローラ、シェル

ドン嬢

心理學教授 博士アミー、タンナー氏

體操教授 ローズ、ガイルス氏

音樂教授 エリノル、スマス氏

圖書教授 イダ、カツサ、ヘッフロン氏

談話及博物教授 マリオン、フランスター、ワッ

●本會の目的は、要するに育兒に關して一汎公衆の
知識及興味を増進せしめ、又公立學校の要部とし
て幼稚園の増設を獎勵するに在り。而して本校の
目的とする所は、眞誠なる教育的心理學及哲學の
知識を應用して初等教育の理論及方法に熟達せる
婦人を養成するに在りとのことなり

新刊紹介

全一冊

湯本武比古書

少年書類の修身童話第九卷として出だせるもの附錄にならすもの
といふ寓言を添へたり。全體假名を以て記され併ひ其假名遣ひ
は全く著者の考案に出でたる新規の遣ひざまなり。著者は修身童
話としてよりも寧、假名遣ひの新案を世に發表せんとして出せる
が如し。斯道に從事する人の一讀すべきものなるべし。（定價十

●東宮御慶事の記

全一冊

横川回天著

過般の東宮御慶事のこと、も詳審に記録せられたる優美書なる

物なり。（正價卅五錢　發行所　同社）

す。（定價四十錢　賣捌所　三書堂）

●人皇の始

全一冊　遊佐誠甫著

歴史修身談の第二篇として、神武天皇より崇神天皇末までの間のこと最も面白く叙述せられたるもの、少年の讀物として極めて良好のものなるべし。（定價十二錢　發行所　同社）

●國文學　●佛語　●解釋

全一冊　織田得能師著

我が國語につきて十分に研究せんとするには、是非とも佛語の意義に精通せざるべからざるは何人も認むる所、然も佛語の意義の

幽玄なる、其出所知り易からざる、深く國文學研究者の苦みし所な

り本書は竹取采花、枕草紙三鏡、神皇正統記方丈記、十訓抄、徒然

草、古分集拾遺集等十二種の國文學中に引用せる悉皆の佛語を精

密に解釋せられたるもの、著者は佛教界の碩學、もとより尋常一

様の片々たる杜撰の書と同視すべきにあらず、全紙五百ページ以

上巻首に五十五ページの索引を附せられたるなど用意至れり、國

文學研究者は之によりて最有益の方便を得たりといふべし。（定

價一圓五十錢　發行所　光融館）

●袖珍和獨會話字典

全一冊

酒詰謙之助著

此種の書物は、獨逸語研究者に向つて、極めて必要のものにして然かも從來未に見る能はざりしもの著者は獨語學者として夙に吾人の推崇せる人、僅に百ページ以内の袖珍書の中に日用最も普通の和語を獨語に對譯し單語を引けば直ちに之に伴ふ會話の見つかる様にせり。吾人は新學研究者座右不可缺友として推薦せんと欲

●國史通釋　全一冊

杉山俊之助編
文悟

本書は二百頁餘の小冊にして其名の示すが如く國史上著者なる人物、地名、制度、文物、宗教等を各々其項に分ちて簡單明瞭に説明したるものなり。通釋と云ふ名は少しく大袈裟に失する感あり却て便覽とか、要解とか命ずる方良からんと考へらる然れども本書の世に出でしが爲め小國史か獨習するものに對して許多の便利を與ふるは我々の喫々を要せずして知らるゝ所なり。（定價四十錢　賣捌所　金昌堂）

●明治才媛歌集　全一冊

女子の友記者編

これ女子の友讀者諸媛のものせし幾千の和歌新體詩等を集めて一冊とせるもの優美にして輕便に出來たり夏期の好伴侶ならん。

（定價二十五錢）

●東洋女訓叢書　第四篇

女子の友記者編

第四篇としてつばめ石ぶみを出だせり。これは元縁年間の書にして歸雁、介婦の教、慈母嘉言、駕方の帖、賢女の判、貞女烈女の判、

似似もの判等併せて十三卷より成りたるもの、其内容の如何によりて大抵察知せらるべし。輕薄浮華淫靡奔放なる現今の杜撰極まる寫實文學より他に讀むことを知らざる現代の女流諸君に講んで此種の書籍を推薦せん。（定價四十五錢　以上二書　東洋社發行）

婦人と子もど第一卷第七號

新刊雑誌

なんな
日本婦人
女子の友
女鑑
うらにしき
家庭
教育實驗界
教育學術界
教育時論
日本之小學教師
兒童研究
婦人衛生雜誌
衛生談話
哲學雜誌
婦女新聞
よろづ報知
東京市教育時報
あけぼの
たのしみ
東洋哲學
京阪神保會雜誌

第五號
第十九號
第二百三十一號
第一百四號
第六號
第七卷第十號
第三卷第二號
第五百八十二、三、四號
第三卷第三十號
第四卷第二號
第一百三十九號
第五號
第六卷第七十二三號
第五五六七八九號
第十三、四號
第九號
第一號
第一號
第八編第六號
第六號

大日本女學會
帝國婦人協會
東洋社
國光社
尚銅社
大日本佛教婦人會
東京育成會
同文館
開發社
國民教育學會
教育研究所
大日本婦人衛生會
通俗衛生茶話會
哲學雜誌社
婦女新聞社
扶桑廣告株式會社
東京市教育會
姫百合社
三榮社
東洋哲學會

有田學友會報
第三號
名古屋高等女學校卒業生報告書
第二號
永東書店

有田學友會
第三號
第三號
第三號
第三號

百二

次號豫告

子供は集母の顏色と言葉使ひはひさ子
女史の筆に成るもの、例に夏の海邊は、東海生
由りて本誌獨特の好文字夏の海邊は、ふみ子兩
出だせる納涼の好伴侣八月の自然界は、摩訶生が輕妙の
涼の好伴侣八月の自然界は、摩訶生が輕妙の
地女監參觀記は、窈窕花の如き婦人界の側面
實地の視察に付きて最痛切に寫し出せるもの千代尼の夏期の俳句
は下村教授の筆によりて此の絶代の女性文學家の思想を髣髴たらしめ
は下村教授の筆によりて此の絶代の女性文學家の思想を髣髴たらしめ
總領のじんろくは秋山國手によりて面白く説明せられたり
其他授の母と
文苑寄書例によりて賑かなるべく
教育を始め學術、史傳、講義各欄の續稿
子と

も欄には從前のお伽話一口話等の外更に英雄豪傑等の面白き逸話、少年談等を掲載すべし。
追つて七、八兩月間に限り寄贈原稿等は凡べて東京神田區一ツ橋通り町十三番地東基吉宛にて御送附相なりたく。尙ほ毎十五日以内に御寄贈の分は翌月の本誌に登載いたすべく候。

會

報

フレーベル會第廿一常會記事

明治三十四年六月一日午後一時三十分より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會中村主幹の京阪地方視察談話及會員秋山七郎氏の俚諺總領のじんろくにつきての談話ありて後唱歌(椿、馬、才女、近江八景及螢)及遊嬉(大寒小寒、坊さんく、椅子とりさがしもの及鳩の遊)を練習し保姆合唱歌を以て閉會せしは午後五時なりき來會者八十九名他に同伴者數名

入會

東京ノ部

本郷區誠之小學校
本郷區弓町一丁目廿五番地

小向きみ
數藤きん

女子高等師範學校
赤坂區青山小學校

麹町區富士見小學校
本所區中和小學校

淺草區柳北女子小學校
下谷區谷中清水町廿番地

小石川區表町百九番地

下谷區谷中清水町廿番地

地方ノ部

大分縣大分幼稚園
神戶市神戶幼稚園

相州横須賀町横須賀小學校
堺玉縣浦和町百三十五番地

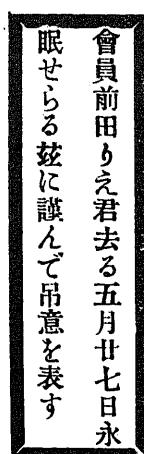
福岡縣遠賀郡若松町大字若松八十三ノ二
島根縣濱田高等女學校

臺灣淡水港辦務署

退會

| | |
|------|------|
| 太田ため | 門脇のぶ |
| 中村 | 相川のぶ |
| 矢島とせ | 川島みづ |
| 柳川 | 島井上 |
| 浅井 | 春田幹 |
| 上 | 田隆 |
| 松 | 田 |
| 馨 | 光 |
| 義 | 松 |

會員前田りえ君去る五月廿七日永
眠せらる茲に謹んで吊意を表す



第六條 本會の目的を達せんが爲に左の事業を行ふ

一 講會 每年四月廿一日之を開き保育に關する演說、談話、保育學考品、幼兒成績物展覽、會務の報告

幹事の選舉等をなす

但し會日は會長の意見により之を變更することあるべし

一 常會 每年二月、六月、十月、十二月の第一土曜日之を開き保育に關する演說、談話、協議、實驗等をなす

一 組合會 會員中特に或る事項を研究せんとするものを以て組織す

但し別に組合會規約を定めて會長の承認を経るものとす

一 雜誌發行 每月一回雑誌を刊行して之を會員に配布す

一 前項の外本會の目的に裨益ありと認めたる事件

第七條 本會に左の役員を置く

會長 一人 會務を總理す

主幹 一人 會長を輔佐して會務を管理す
幹事 十人 會長の指揮を受け會務を分掌す
評議員 若干人 重要な事件に關し會長の諮詢

に應ず

第九條 主幹は會長の特選とす

第十條 幹事は會員の互選とし其任期を二ヶ年とす
但し毎年半數を改選するものとす

第十一條 評議員は會長の特選とす

第十二條 本會は必要に應じ特に委員を設け又は書記を雇入ることあるべし

第十三條 此規則は會員三分の二以上の同意を得るにあらざれば
變更することを得ず

會告

ほんし 本誌は くわい フレベル會くわい で發行するのですから、ほにゅう 御入會くわい なさらう と思ふお方は、ほんし 本誌登載の規則御承知の上うへ で入會くわい あらば雑誌はほんくわい 本會より送附さふ します。
若し おほ たゞ雑誌だけ御購求こうしゅう になりたいと覺し召す方かた は直切ちぎれ に賣捌所うばほうち へ御注文ごちゅうもん を願ひます。



此廣告依に廣告は方御の文注御り依に見を供子と人婦は

通俗衛生顧問

左獨逸醫學士 丸川秀雄先生 著
東京板橋病院長 守川南洋先生著
日本藥學協會講師 鳴田修治先生著
(名)諸藥獨劑術

- 全一冊三百頁 ●正價金九拾五錢 ●郵稅金六錢
- 上製金字入 ●正價金壹圓三拾錢 ●郵稅金八錢
- 著者獨逸にて研究の結果諸病の起因病状を説き以て病な其起らざる前に防ぎ或は諸病の發する可き起因を撲滅し或は既に發したる病を療治する方法を詳記す
- 郵券四錢を要す

藥學協會賣捌所 神田表
東海信文社 ●良明堂 ●中西屋 ●南江堂 ●日黑 ●丸善 ●大倉 ●服部 ●
之堂 ●牛田屋 ●大阪丸善 ●京都大黒屋 ●名古屋 ●三輪 ●片野

婦人科専門ドクトル 宮田守治先生著
中央看護婦會長 松本安子先生著

男女生殖健全法

四六判全一冊 ●密畫數個入 ●正價金壹圓拾錢郵稅六錢

本書は日本新醫學の原理に依りて詳説せる者にして先づ生殖器の解剖生理を説き且つ其疾病的な説べ夫婦とは如何なる者なるや情交とは如何なる者なるやを解釋し情交に因る諸障害を論じ後に小兒養育の事を記載せり世の夫婦なり父母なる者必ず座右に備ふべき資書なり

●水野 ●目黒 ●小林 ●山本 ●丸善 ●中西屋 ●東海信文社 ●上田屋 ●其
他 ●京橋銀座 ●京橋二
賣捌所

服部書店

京堂 ●修學堂 ●林平
東海信文社 ●上田屋 ●其

横川回天謹編

東宮御慶事の記

頗美本全一冊定價金三十五錢
郵稅金四錢郵券代用一割增

附錄 皇孫御降誕の記

本書は明治三十三年五月十日宮中に於て行はれたる東宮殿下御慶事御儀の御模様を全國の同胞に知らしめ家庭並に學校の教育に資せしむると共に永く後世子孫に傳へて以て益々忠孝の大義を發揮せしめん爲め當時に於ける諸新聞の記事及び直接見聞せる所に就きて編纂し其舊記等に屬するものは更に名士及び古書の考證に據り猶ほ宮邊に因みある幾多名士の教正を経たるものなり又其刊行稍遅きを致せるも而も其の後れたるは蓋し又其の記事の精確なるを證するなり殊に 皇孫御降誕の如き其御模様の詳細を網羅せるは又本書の右に出づるものなかるべし

二丁目一番地 二
東京市神田區美土代町

（電話本局二四二〇番）
發社

（後付の1）

乞を記附御旨るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

夏講習會之良考書

各府縣小學校教員檢定試驗
参考用書に採用

芦田惠之助編纂

唱歌實驗遊戲法 增補四版

定價金六十錢 郵稅金八錢
遊戲の種類百有餘 ● 説明書三十二圖 ● 遊戲せる寫眞版四面 ●
遊明細切丁寧 ● 是實に遊戲書の大王なり
京都府師範學校教諭横地捨次郎著

唱歌遊戲法 第一輯 再版 版

定價金六十錢 郵稅金八錢
遊戲の種類百有餘 ● 説明書三十一圖 ● 解説親切丁寧なり
本遊戲寫眞版 ● 舞踏動畫 ● 他書に優る數等

高島平三郎著

兒童心理學綱要

定價金五十錢 郵稅金六錢

兒童心理に有名なる高島先生の著説明簡潔周到なれば 講習會の参考用書としては本書の右に出る者なし

高畑琴子著

實驗裁縫教授書

定價金三十錢 郵稅金六錢

本書は諸學科教授法により難易の順序を斟酌し 秩序的に授く
方法を多年研究の結果公にせられたる也

鹿児島縣師範學校教諭寺内頼著

理論的教育學

定價金二十五錢 郵稅金四錢

本書は要を改進ヘルバート派の説を取り合せて 新心理學説による方法を論述したる者なり

發行所 三條上ル 京都市東洞院 村上書店

發行所

金

昌

堂

國文通鑑

(冊一全)

兒童文例 全一冊

定價金十錢 郵稅金二錢

本書は今日採用せられたる讀本の一大缺點たる書簡文の模範を補はんがために編したものなり文體話語に近づきて文格を破らざるは實に本書の大特色

國學院講師逸見仲三郎先生校閱

全一冊

國語研究組合編纂

近刊

再訂高普通文綴方教科書

全二冊 定價各金十五錢

郵稅各金一錢

本書は改正教則に準據し國語綴方を説き兒童に示すべき模範文を輯めたるもの、一注意すべき要件、二教授法、三添作法、四往復文の容儀、五公用文、是れ本書の項目にして其文體の世の實際に適せるは慥かに本書の大々的特色なり

國語研究會編

此廣告に依り方御の文注御るた見を供子と人婦は方御旨を記附御

明治四十三年六月三日刊發號二十九臨時之子女友之

第四才媛

口繪寫眞版二十四頁●東京市内各女學校長職員
伊藤貞勝君、小山作之助君、成瀬仁藏吉、吉村寅

高嶺秀夫君、柏原土力久元君、男爵細川潤次郎君、
棚太郎君、麻生正藏君、西田敬止君、水谷直孝君、
柳橋絢子自、鷲田彌生刀自一、大日本婦人教育會

下田義天類先生肖像並に筆蹟●熊本市九業校卒業生
高族女學校校長野縣師範學校長、長野縣師範學校
日本女子大學校開校式●長野縣師範學校校長、
名古屋高等女學校卒業生●福地帝國圖案社主畫
金原霞汀、安井耕圃諸女史畫●杉浦玉舟、同小山

一豊夫人●渡邊幽香女史畫●松下禪尼、京都少女唱歌會
女學生●鈴木秋子娘書●東京女學館、生徒畫●朝鮮、
女子學校、女子職業學校、女子高等師範學校、
日本女教員會●華族女學校、大日本女子高等師範學校、
並に會員●松下禪尼、福地帝國圖案社主畫●杉浦玉舟、同小山

風俗●懸賞募集當選書畫●小說友千鳥插畫●速水

染畫●日本女教員會●華族女學校、大日本女子高等師範學校、
並に會員●松下禪尼、福地帝國圖案社主畫●杉浦玉舟、同小山

一百二十頁●名家歌文、募集歌文、學生歌文
など何れも妍を争ひ芳を競ひ明治昭和歌文

放女史の文●田附錄に文學の精華を蒐め燐爛たる大觀人目を眩す●梅子女史の「歐米に於ける婦人の俱樂部談」鈴木さむしろ女史津●高木三郎氏の「韓國婦女譚」安井哲子女史等を掲げ有益多趣一讀手を

放女史の文●田附錄に文學の精華を蒐め燐爛たる大觀人目を眩す●梅子女史の「歐米に於ける婦人の俱樂部談」鈴木さむしろ女史津●高木三郎氏の「韓國婦女譚」安井哲子女史等を掲げ有益多趣一讀手を

定價金貳拾錢無遞送

料

婦人必讀書目

金三十五錢郵稅四

五十五錢郵稅各六錢

錢

第一册金四十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

第二册金五十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

第三册金四十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

第四册金五十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

第五册金五十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

第六册金五十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

第七册金五十錢郵稅六錢

五十五錢郵稅各六錢

錢

此廣告に依り方御旨を記附御るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

此廣依に告御文注御より人婦は方御と供子と見を記附御旨るを乞ふ

總裁小松宮大妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人

大日本文學會發行

(東京麹町區土手三番町二八)

第六號發兌

第壹號以下再版
出來せり

定價金拾五錢全國無遞送料

東京神田表神保町三

大賣捌

東京堂



(前附)三輪田真佐子筆歌かるた(論說)女子の職業について法學博士添田壽一●吾等の良友安井哲子●新女大學評論德富猪一郎(學藝)心理學大意島村龍太郎●作歌批評大口鯛二●作文批評今泉定介●構文上の一用意五十嵐力(修身)經驗の効佐方鎮子(齊家)病者の居室後閑菊野子●改良女服仕立方渡邊辰五郎(世務)法制談岡戸法學士●經濟談伊藤秋南●鑑山談石井相洋●各地產業の實況(史傳)英國女皇傳下田歌子●十九世紀の婦人櫻井鷗村●國史上の婦人津田黃昏(譚艸)暗流水谷不倒●生捕られ熊湖山人(詞藻)皇長孫の降誕を賀し奉る歌●みやび會員詞藻(雜錄)東海道汽車の旅喜田文學士●岡山孤兒院の歴史炭谷小梅子●圖案武村千佐子●片輪車の模様について片野四郎(時事)不景氣の回復期●新内閣(彙報)兩陛下の御仁惠其他數件

事新全

醫學博士三宅秀先生著
大日本女學會發行

總クロース綴金文字入り
定價金六十錢郵稅金六錢

大賣捌

東京神田一ツ橋通町七

有

斐

閣

此書は醫學の泰斗たる元醫科大學長醫學博士三宅秀先生が文部省の嘱託に由り各府縣師範學校高等女學校の女教員方を集め夏期講習會を開きて講義されたるものを此度大日本文學會より發行せられたるなり書中衣服●飲食●食物●住居●育兒●看病の五篇に別ち細密に其衛生法を示し我國一般の民度に應じて實行し易き様に説明せられたり家政を主る人々に取りて此上なき有益の良書たるは勿論教育の任に當る人々にも缺くべからざる参考書なり

此廣依に告文注御方は婦人と子供は方見を記附御旨るた見乞ふ

女子高等師範學校教授 關根正直先生編

教科
適用

中古文選

女子高等師範學校教授 三輪義方先生纂

和紙美本 上卷 參拾錢
上下二卷

和紙美本 定價 上卷 參拾錢
郵稅 下卷 廿五錢
四錢ヅ、

教科
適用 中古歌選

和紙美本 定價 金參拾五錢
全一冊 郵稅 金四錢

此二書は中等教育の國語科を修了し尙進んで中古の文學を講習せんとする者の爲に編纂したるにて「文選」には序文日記物語草子及び消息文の秀逸なるもの數十篇を選み附錄として祝詞宣命等數篇を加へたり又「歌選」には三代集及び新古今集の中より意調共に優れたるを選み末に萬葉集の長歌數首を附錄して長歌の體をも知らしめたり故に此二書は高等學校師範校高等女學校補習科等の教本として最も適當なるものなり

發行所

東京市日本橋區
通三丁目

成美堂
黒書店

東京市京橋區
南傳馬町二丁目

◎國民教育學會機關雜誌（主筆多田房之輔）

（第三卷三十一號七月十二日發行）

（後付の文）

日本之小學教師

●創刊三周年餘（會費一ヶ年前納金一圓二十錢
郵稅不要）●一冊拾錢六冊前金五十七錢●十二

冊前金一圓十錢外に郵稅一冊一錢宛

大日本帝國小學教師の一大共同機關として生れ出でたる本誌は、頗る長足の進歩をなし今や會友并に購讀者の數合せて一萬以上に達せり。特に廿八號ヨリ一大改良ヲ加ヘ特ニ保證金ヲ納メ新聞紙條例ニヨリ言論ノ自由ヲ得タレハ一面ニハ適切ナル材料ヲ撰擇シテ教室内ノ燈明タルト共ニ一面ニハ侃々諤々以テ小學教師擁護者タルノ任務ヲ貫徹スヘシ不羈獨立ノ本誌ガ如何ニ活潑銳利ナル運動ヲナスカハ豫世人ノ注意ヲ乞ハントスル所ナリ

中學校

師範學校 教員受驗者必携

附 最 近 試 驗 問 題 集

正價金二十五錢

郵 稅 四 錢

會友には特別割引

郵稅共金二十四錢

本書は検定の程度方針等を知らんとする者の爲めに本年度執行の豫備試験及本試験問題并に昨年度の本試験問題を掲載し且試験規則出願者心得受験者用意、参考用書目等を詳記したるものなれば當に受験者勉學の好伴侶たるのみならず尙ほ進んで學術の研究をなさんとする者の爲めに一大餘師たるべきなり

發行所

東京市神田區表神保町一番地

國民教育社

此廣依に告御文注方御人婦と供子見を記附御旨るた見乞ふ

見落すなかれ必ず讀め

糸登美子著

衛生婦人化粧法

袖珍美本

定價拾錢
郵稅共

開けて嬉ひ此本は小野ノ小町や揚貴妃が化粧の法を始
とて専ら衛生をして其方法をくわしく書き記し
たるものなれば是迄世間に有觸れたる書の比にあらず
又附録として婦人一般衛生に關する事を書き添へたれ
ば衛生を重んぜらる御方は是非一本を坐右に備ふべき
なり

發賣所

東京市神田區
西小川町二丁目一番地

一二育舍

○夏季女子講習會廣告○

今般本會ニ於テ教員タルニ必須ノ學力ヲ補充シ兼テ一
般女子ノ爲メ新智識ヲ啓沃セシムルノ目的ヲ以テ本年
八月一日ヨリ全月二十一日マデ東京神田橋外東京府第一
高等女學校内ニ於テ夏季女子講習會ヲ開ク講習志望者
ハ講習科目、住所、族籍、職業、氏名、生年月ヲ記シタ
講習科目及講師
書面(用紙半紙)ヲ本會事務所ニ差出スベシ
井てつ子君一國語、東京府女子師範學校教授安
式講習法、女子高等師範學校教授小山作之助君
華族女學校講師小笠原清務君
金貳圓但シ本會々員及傳習所現存生ハ十分ノ一ヲ減
證明書ヲ授與ス
女子教育上有益ナル工場學校等ヲ參觀スルノ便宜
ヲ與フヘシ
通町廿一一番地
神田區一ツ橋

理科教授用掛圖廣告

矢澤米三郎君校

帝國通信講習會編

理科教授用動物圖

本圖ハ犬猫牛馬鷄禁止鳥鳴鶴蛙蛇鯉鯛ノ類十葉ニテ
定價金壹圓五拾錢 說明書 金拾錢

教場遠隔ノ生徒ニモ圖畫明瞭ナリ

生物科植物圖

本圖ハ梅櫻蘿蔓蒲公英麥豌豆松百合胡瓜栗等ノ十葉
ニテ
第一綴 縱二尺六寸 巾二尺

定價金壹圓五拾錢

說明書 金拾錢

近刻●理科教授用生理圖●同上別動物圖第二綴●同上
植物圖第二綴 第二綴近刊
右ハ模寫真ニ迫リ着色鮮麗ニシテ圖畫ハ遠隔ノ生徒ト
雖トモ明瞭ナリ實ニ理科教授上必要ノ掛圖ナリ御購求
アランコトヲ乞フ

發行所

東京日本橋區本石
町三丁目廿三番地

金昌堂

家庭 訓話 家庭

昔ばなし 桃太郎

家庭 訓話

昔ばなし 舌切すゞめ

(後付の八)

木版密畫極彩色頗美裝製本

定價金十二錢 郵稅金二錢宛

本書は繪畫を中心とした家庭教訓にして今回印刷するに至りたるものなり、されば書は有名なる大家の筆、彫刻極めて巧緻、紙質良好、印刷鮮明、畫風といひ、彩色といひ表裝といひ實に高尚優美なり、世の中産以上の人々よ速に一本を家庭に供へて御伽噺の資に供せられよ、幼兒の教育は耳よりするよりも眼よりすることの大なるものなり、後來幾多の桃太郎を出さねばならぬ我大日本帝國、一家に主婦たる御婦人方、請ふ本書をブカリ～～と流れ出でたる桃と做して之をとり上げ玉ひてよ。

發行所

東京日本橋區本石町三丁目二十三番地

金 昌 堂

此廣依に告御文注御り方御は人婦と供子をた見を旨る御附記を乞ふ

高等師範學校講師士遠藤隆吉氏著

現今の社會學

定價 金三十錢 郵稅 金四錢

社會學の書公刊せらるゝ者多しと雖も概ね翻譯の類のみ其日本學者の著述に係かり且革新の説を以て著述せられたる者之を現今の社會學となす斯書は學士の特見にして其見識に屬する所の集合意識説を以て一貫せる者として其見識の卓拔なる議論の明晰なる而して行文の流暢なる毫も遺憾とするべき所なし且つ學士の豊富なる學植を以て社會諸般の事實を把へ來り僅に之を數十頁に縮めたる者なるを以て字々味あり句々眞理あり他の引き延ばしを目的とせる書に類せず弊堂學士に乞ふて出典の榮を得たり社會の大勢に着目する人乞ふ一讀して以て其價を得る所以を知了せられんことを

東京日本橋本石町 金 昌 堂 集 発
大阪備後町四丁目 東京神田表神保町 全 全

各地賣捌所

發行所

東京 東京堂、北隆館、東海信文會社
森川町一番地 帝國通信講習會

新講習用教科書

東宮侍講 本居宣長著

簡易日本小文典 再版

通普理科教科書

再版

初等教員検定用學術講義

再版

通普理科教科書

再版

初等教員検定用學術講義

再版

初等教員検定用學術講義

再版

學科教育及試驗問題答案等(千二百餘頁)全六冊出來

第一編 修身治錢 文法武拾五錢 算術武拾五錢 日本地理參拾錢 外國地理參拾錢 日本歷史參拾錢 教育學四拾錢

第二編 教育問題 算術問題 文法問題 算術問題

第三編 本書ハ問答的講義ニシテ附錄ニハ試驗問題ト其答案トナ數多登載

セリ 一般ノ讀者ノ便ヲ圖リテ一科毎ニ分冊シタルヲ左ノ普通學講義

トス 何時ニテモ求ニ應ズ

(後付の九)

大和田樹作歌

諸名作家曲選成館開成集

忠勇唱歌

國育民

第一編 楠公父子

第二編 四十七士

各冊價六錢郵稅貳錢

歌美と雖も曲佳ならずんば何を以てか吟唱者の感情を動かすを得ん、曲妙なりと雖も歌にして粗ならんには誦して何の益する所もなかるべしこれ本館の常に歌曲の撰擇に心を碎く所以にして本書の價值蓋し亦此に在り

●見本は校印ある御申込
に限り郵呈す

東京小石川小日向水道町

東京開成館

大阪心齋橋北久寶角

大阪開成館

●去年本館一たび世に出鐵道唱歌の第一、此二書に赴けりより世に出づ、二書忠勇唱歌の間に銛鍊を加へて更に一層の銛鍊を以て、歌の間に高尙なる吟唱の間に高尙なる吟唱を期す希に與へ史的美詠明を與ふるは混沌たるあらんかに足るるもの光

此廣告依に御文注は婦人と子供は方御の見を記附御旨るたる乞ふ

學習院教授納所辨次郎先生、高等師範學校兼東京音樂學校教授田村虎藏先生共編

初編上中下三冊同價

洋製頗る美本

二編壯快繪畫插入

一冊金十錢宛

壹冊郵稅二錢

郵券代用不苦

(以下續出)

○本書は高等師範學校、學習院小學科唱歌教授に從事せらるゝ納所田村の兩先生が熱心なる研鑽の上編纂せられたるものなり○本書は主義目的なき雜駁なる在來の唱歌を排して尋常一學年より高等四學年による迄各學期に配當したる本邦唯一の教育的唱歌集なり○本書は高等師範學校、學習院、女子高等師範學校の教科に御採用の榮を得從て教育社會空前の好評を博し再版を出版せるものなり

高等師範學校鈴木米次郎先生編

日本遊戲唱歌

第一編既成

三編七月一日發行

壯快繪畫人

洋製頗美本

壹冊十五錢宛

壹冊郵稅二錢

郵券代用不苦

(以下續出)

本書は専ら小学校幼稚園、家庭等に於て用ゐる遊戲唱歌の材料を供料せん爲特に先生の御實驗に依れる新意匠の遊戲唱歌又は運動の五六種を毎編掲ぐるものなり

發

行

所

東京銀座三丁目二番地

十

字

屋

(婦人と子ども 第一卷 第七號)

三月三日川十四年七月二十五日發行(毎月一回五日發行)

貢擄所發兌

北金昌隆館東海信文公會社

本町日本橋三丁目企劃株式會社

古學上の珍品○古物像の發掘外數件
濃北豊島郡志村の發見品○古墳中の中の出土物○一條教房の墓○奈良興福寺の古物○考
○集古會○好古會○二十年祝賀會○かくめやの古代雛○武藏湖畔の古物○武藏

林勝邦(第一)○武藏國分寺(第二)○山城原市之助(第三)○納骨器と容れたる石棺(第四)
○考古雞姐(第五)○武藏國分寺(第六)○山城原市之助(第七)○納骨器と容れたる石棺(第八)

皇國古版沿革考補(沼田類輔)○韓國古版沿革論(八木栄三郎)○皇國古版沿革考(江藤正澄)○
○南壁寺の遣錦(山縣昌載)○武藏大里郡野本村の發見物に就

○武藏大里郡野本村發見の古鏡

考古界 第一號 目次

事又精選者たると同時に又其事の神像を彌入しあれば當に考古家歷史家の必讀せらるべき良雑誌
組織せられたる考古學會は今般文學博士三宅米吉氏會長の下に斯記

第一號 發六月二十日 定價金拾貳錢



文學博士三宅米吉氏會長考古學會發刊